



| | |
|--------------|---|
| Title | ムラーダーバード市の宗教施設 |
| Author(s) | プシュペンドラ, ウメーシュパール ヴァルナワール |
| Citation | 印度民俗研究. 1988, 6, p. 31-75 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/50344 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ムラーダーバードの宗教施設

プシュペーンドラ・ウメーシュパール・ヴァルナワール

今日、われわれが見ることのできる宗教施設は、時代の社会的要請に応えるために、優れた人物たちが伝統に従いつつ生みだしてきたものである。こうした場所に参加したり、喜捨等を通じてこれら施設を援助することは社会的に必要欠くべからざることとなっている。参詣に来る人々の数は、現在も変わっていない。社会を一定の規範のもとに維持することは、こうした施設の責任である。社会に備わる最良の美質もこれらの場所なくしては考えられない。知識と信仰について社会はこうした祈りの場所で時に応じて学んできた。これらの宗教施設に対する迷信から社会組織が形骸化し、複雑なものになる時はいつも優れた人物が現われて礼拝を簡素なものにし、新しい宗派を生みだしたのである。

いろいろな樹木の生えている森は成長するが、ただ一種類の草木しか生えていない森は成長しないというのは一つの自然の摂理である。生まれや宗派の違いに対して寛大でなく因襲に囚われた社会では、物質的發展の可能性が非常に限られる。人々が寛容で別の社会とも接触するような社会では、芸術、文学、文化、科学等の分野が発展し、成果を挙げることができる。なぜなら、違いは考え方にあってダルマ自体にはないからである。ダルマという語の意味は把握する、ということである。何かを掴むため、もしくは理解するために大切なのは、布施や寄付よりも、献身の気持を持つことである。献身からこそ、敬虔、愛、信仰、そして祈りが生まれたのである。

インドのカシミール地方のシュリーナガルという町にシャンカラチャーラヤ (Śaṅkarācārya) という名の山がある。シャンカラチャーラヤ⁽¹⁾はケーララ、即ち、インドの最南端の地方の人であった。1200年前、現代と違って旅の便宜も、道もなく、一般の人々にとって旅行に身の安全もままならなかった頃、この若者はケーララからシュリーナガルにやって来て、近くの山に自分の信仰するシャンカラ⁽²⁾の像を安置した。ケーララで生まれた彼は、ヒマラーヤで亡くなった。このようにヒンドゥーにとっては全インドが一つであり、至る所が彼らの死に処となった。コーランには神は一つとある。しかし、今は新しい唯一主義、即ち人間は一つとあるべきである。ヨーロッパ人、そしてアジア人だけではなく、全世界の人類が一つである。このことは世界中の宗教書に説かれている。しかし、われわれは、聖典を読まずに、祭り上げているだけである。実際、人と人を結ぶためのものをわれわれはそれとは逆のものにしてしまった。俺はコーランの信者、お前はバイブルの信者、俺はそれ、お前はあれと。

I ムラーダーバード市の正統派ヒンドゥー寺院

(1) ホーリカー・デーヴィー・カー・ターン⁽³⁾ (Holikā Devī kā Thān)

ボグプル・ミトゥーニー (Bhogpur Mithūnī) 地区；ヒンドゥー教の伝統には家族ぐるみで行なう礼拝の慣習がある。パールグナ(Phālguna)月⁽⁴⁾の満月の日にホーリー (Holī) という名の祭が祝われる。夜中に四ツ辻ごとに薪を集めて、家庭で用意した食物をお供えして、ホーリーと呼ばれるその積み上げた薪に向かってヴェーダのマントラを唱えつつ、一同揃って礼拝する。それから皆の前でホーリーに火がつけられる。これをホーリカー・ダハン (Holikā Dahan) と言う。この時、男たちはその年に収穫した小麦、大麦の穂を砂糖黍の先に結んだものを、それぞれ手に持って火にかざしながら七回火の回りをまわる。めぐり終えた後、火の一部を家に持ち帰り、そこでも同じ様にしてホーリーカー・ダハンを行なう。この時に女たちは家族ごとに集まって砂糖黍に穂を結んで焼く。男たちはそれぞれ知り合いの家の女たちにアーカト (Ākhat)⁽⁵⁾を与えに、そして男たちに会うためにでかける。アーカトはアクシャタ (Akṣata) の訛ったもので「不壊」という意味がある。アーカトを与える時、互いの縁がいつまでも切れることのないようにとの願が口にされる。これがホーラーシュタカ (Holāṣṭaka)⁽⁶⁾の最後の日である。翌日、色粉、色水を互いにかけてあって祭りを楽しむ。色水遊びの翌日、チャイトラ (Caitra)⁽⁷⁾月の黒半の2日から15日間にわたって、ムラーダーバードではジャート (Jāt) という行事が行われる。市民は皆、この15日間のどの日かにホーリカーを燃やした場所にジャートのためにやってくる。夫婦できて、創造の女神に花、果物、食物等を供えて拝むしきたりである。ジャートという語の意味はジャーディヤ (Jāḍya) 即ち無慮、不覚ということである。この行事は子を生すための夫婦の交わりの際の不覚を捨て、家庭人としての義務の誓いを立てるためのものである。この行事がいつ、どのようにして始まったかについての伝承は不明である。

寺は古いと考えられている。昔はここに供儀のための祭壇があったのだが、50年程まえから女神が安置されている。毎年ホーリー祭の後15日間、ここに何10万人という人が参詣に来て、市が立ったようになる。人々は家族連れで弁当を持参して、一家揃って礼拝をした後、その神聖な地面に腰を下ろして食事をしてそれぞれの家路につく。

(2) マナサー・デーヴィー・カー・マト⁽⁸⁾ (Manasā Devī kā Maṭh) ;

このマトは市のキスロール (Kisrol) 地区の、ラームガンガー (Rāmgangā) 川の岸辺の古いダスワーン・ガート (Daswāghāt) の近くに今では憐れな状態にある。近くに掃除人カーストの人たちの居住区があって、汚れがひどくなってきたために、礼拝をしにくるヒンドゥーは誰もいなくなってしまう。聖典にはマナサーはアーディ・ナート (Ādi Nāth)⁽⁹⁾シヴァ・シャンカラの娘とされている。この女神はかたくなな性格の持ち主と言われ、シヴァ寺院でシヴァ・リングの上につるされた水瓶は女神のそのかたくなさの象徴に他ならない。マナサーは蛇の支配神である。マナスイ (manasi) という言葉には「心の中で」という意味もある。⁽¹⁰⁾従って、心に生まれた情とい

うことから、マナサーを愛欲の女神と考えることもできる。

- (3) ヴィシュヌ・マンディル (Viṣṇu Mandir); ムラーダーバード市の西南の境にあるローディー・プル (Lodī Pur), ヴィシャン・プル (Viśan Pur) 地区に旧式小形レンガ造りの三階建の寺があって、ヴィシュヌ寺院と呼ばれている。美しい形をしている。寺には神像は一体もない。ただ、インドのニルグン・サント (Nirguṇ Sant) 派⁽¹¹⁾において伝統的に師の象徴とされる足跡が刻まれている。

かなり昔からこの寺はヴィシュノーイー (Viśnoī)・クシャトリヤ⁽¹²⁾たちと結びつきがある。ヴィシュノーイーの人々は元来クシャトリヤで、ヴィシュヌ派に属している。ミヒルクル (Mihirkul)⁽¹³⁾という名の王が攻めてきた時、ここでは神像の礼拝が禁じられた。それ以降今日まで、像が安置される度ごとに、寺への信仰が減じた。ミヒルクルは6世紀の人である。しかし、この寺の基壇に使われているレンガはラージプート時代のものである。寺の様式もラージプート風である。しかし、部屋の造りは仏教寺院のものに似ている。

インドでは神像を持たないヴィシュヌ寺院が普通であった。こうした場所はインド菩提樹の下にあり、そこで天上の先祖への礼拝がされる。そこにはヴィシュヌ神の履き物が刻まれている。仏陀がボーダガヤーで悟りを得たのもこうしたところであった。

- (4) チョウラーシー・ガンター・カーメーシュワル・ナート・カー・マンディル (Caurāsī Ghaṇṭā Kāmeśvar Nāth kā Mandir); スィッダ・ナート派⁽¹⁴⁾そしてハタヨーガ派⁽¹⁵⁾の時代に左道シャクティ派⁽¹⁶⁾の活動によって、愛欲の神即ちカーマを従えた神シヴァのリングの持った重要性を今日に伝えているのが、このカーメーシュワル寺院である。言い伝えによれば、ここでカーニーパー・スィッダ⁽¹⁷⁾の時に84人のスィッダたちの集会が開かれたという。ハタヨーガから出た左道派の五つのマの字の行法⁽¹⁸⁾の伝授も従って行なわれていた。シヴァ・シャンカラはスィッダそしてハタヨーギーたちのアーディ・ナートと言われている。

カーメーシュワル寺院は市の古い寺である。シュラーヴァナ (Śrāvāṇa) 月⁽¹⁹⁾の間中、信心深い人々が大麻、山査子、つたかずらの葉、ギンバイカの葉そして牛乳をリングに注ぐために早朝にやってくる。シヴァ派の信徒は、ガンジス川の水を入れた、カーンワル (Kāvar) と呼ぶ竹籠を持って、歩いて、シュラーヴァナ月の最後の月曜日にシヴァ・リングに水を供えにくる。これはシュラーヴァナ月の他にも、パールグナ月の黒半の13日、マハーシヴァ・ラートリ (Mahā Śiva Rātri) の祭⁽²⁰⁾の時にも行なわれる。人々は願掛けをして、それが叶うと現在でも歩いて遠くガンジス川の水をカーンワルに入れて持ってきてシヴァに捧げるのである。

1979年11月29日の夕刻、寺僧が勤めを終えて門を閉めた後、何者かが侵入して住職を殺害して、神像の装身具を奪うという事件があった。おそらく、20万ルピー程のものであったと言う。大部分の装身具が金製であった。

シヴァ派の人々はマハーシヴァラートリの大祭の時、シヴァ・リングのルドラ灌頂⁽²¹⁾ (Rudrābhigeka)の儀式を行なう。ルドラはヴェーダの神である。シャンカラの姿はまさにルドラのそれである。自らが知識であり、また知識を授ける者であり、彼こそはルドラともブラフマとも言われる。この時、ヴェーダーンタ派 (Vedāntī)⁽²²⁾派そしてその他すべてのシヴァ派の信徒はルドラーシュターディヤーイー (Rudrāṣṭādhyāyī)⁽²³⁾を誦する。

シヴァの礼拝については特に重要なマントラがある。このマントラは二つにわかれており、前半部分はムリトゥンジャヤ・マントラ (Mṛtyuñjaya Mantra)⁽²⁴⁾と呼ばれる。このマントラの前にウーン・ホーン・ジューン・サハ (ū ho jū sah)というबीジャ・マントラ⁽²⁵⁾ (Bīja Mantra)があり、最後にもこのマントラを付け加えると、マハー・ムリトゥンジャヤ・マントラと言われる。不時の死から人を守るこの靈験あらたかなマントラは殊に有名である。後半部分は娘たちに夫を授けるマントラである。長寿を得ようとする者は、三日間断食をして乳粥を百度、火に献じなければならない。こうすれば百歳まで生きよう。このマントラはあらゆる病いと災いを除くために唱えられる。

- (5) ヴィアーコーン・カー・マンディル (Viārōkā Mandir) ; 市のカンジャリー・サライー (Kāñjarī Sarāy) 地区にヴィアールたちの居住区がある。ヴィアールというのは織工、すなわち布を織る人々のことを言った。今日、この人たちは様々な職業に従事している。彼らの居住区にあり、かつ彼らの先祖によって建立されたためにこの寺はヴィアールたちの寺という名で呼ばれている。

寺は古く、旧式小形レンガ造りである。寺内には東面して立つヴィシュヴァカルマー (Viśvakarmā)⁽²⁶⁾の壁像が一体ある。ヴィシュヴァカルマーは工芸の神である。この神は一面でダクシャ・ブラジャーパティ (Dakṣa Prajāpati)⁽²⁷⁾と同義でもある。またブラフマー神とも同一視されている。寺の中央にシヴァ・リングがある。北面しているハヌマーン⁽²⁸⁾の立像もある。

ヴィシュヴァカルマーの像は下穿きを身につけている。四本の腕には水入れ⁽²⁹⁾、三叉戟等を持っている。正面入口の部屋の上部には古いアルプナー (Alpṇā)⁽³⁰⁾が描かれている。寺の基壇は方形だが、上の塔の基部は八面になっている。

寺のすぐ近くにもう一つの新しい寺が5年程前に建てられた。そこにはいくつか新しい神像が安置されている。サントーシー・マター (Santosī Mātā)⁽³¹⁾、ドゥルガー (Durgā)⁽³²⁾、そしてバイラヴァ (Bhairava)⁽³²⁾などである。

- (6) ジャール・キー・マリ (Jhār kī Marī)⁽³⁴⁾ ; この場所とはカーニーパー・キー・ガティヤー (Kāñpā kī Ghatīyā) の一部であった。ここにジャールという名の行者の墓があって、シュラーヴァナ月のナーガ・パンチャミー (Nāga Pañcamī)⁽³⁵⁾の日に牛乳が供えられる。牛乳を入れた器にこの場所の土を入れて持ち帰り、ラクシャー・バンドン (Rakṣā Bandhan) の祭り⁽³⁶⁾の時のために大麦の種を植える。祭りの日になると女た

ちは自分の兄弟の腕にラクシャー・スートラ (Rakṣā Sūtra) 即ちラーキ (Rākhī) を結び、兄弟の耳に大麦の収穫の象徴として10日前以内に芽ぶいた大麦の芽を置いて彼の輝かしい将来を願う。

クリシュナ・ジャナマーシュタミー (Kṛṣṇa Janmāṣṭamī)⁽³⁷⁾の翌日、この寺にスイッダ・ナート派のヨーギーたちが集まって旗、傘、払子等を地面に立てる。バルタリー (Bhartharī)、ゴープー・チャンド (Gopī Cand)⁽³⁸⁾、ゴークナート (Gorakhnāth)⁽⁴⁰⁾らスイッダの讃歌をサーランギー (Sārangī)⁽⁴¹⁾の音に合わせて歌う。人々は子供の輝かしい将来を願って墓の上に子供たちを捧げる。行者たちは孔雀の羽根扇で子供に触れて幸せを祈る。この時、お供え物として子安貝、菓子をお金と一緒に墓に供える。

(7) ジャールカンドイー・カー・マンディル (Jhārkhaṇḍī kā Mandir) ; ジャールカンドは現在のビハール州の一地方の名前である。ビハールの古い住人はシャクティ派 (Śākta) である。昔、ある時にこの地域の人々が何らかの理由でこの地区にやってきたのであろう。その結果、おそらくラージプート時代にここにシャクティの祭壇が築かれた。ラージプート族はシャクティ派である。この様にここは女神を祭るところである。現在はパールヴァティー (Pārvatī)⁽⁴²⁾女神の寺と言われている。

毎週月曜日は特別の礼拝が行なわれる。40日間欠かさずこの女神の礼拝を行なえば願ひ事が叶うと信じられている。この寺はキスロール地区とバングラー・ガーンオ (Baṅglā Gāv) の中間の市の主要な居住区の近くに竹藪に囲まれて立っている。

(8) ガンガー・マンディル (Gaṅgā Mandir) ; 市内のキスロール地区に大きいガンガー・マンディルがある。古い寺である。アーユルヴェーダ (インド医術) の学匠で、サハスプル (Sahaspur) 藩王国の国師であったマハント (僧院長もしくは住職) の故ミシュリー・ラール (Miśrī Lāl) 氏は、この寺の古さについてあるムスリムの高官のワクフ (Waqf)⁽⁴³⁾による基金で建てられたと私に語った。他の何人かの老人の話によると、この寺は古く、昔ムガル皇帝アウラングゼーブ (Aurangzeb)⁽⁴⁴⁾によって寄進された土地もあるとのことである。マハント・ミシュリー・ラール氏によれば、寺内の井戸から見つかったガンガー女神の像を1918年マハント・クリシュナーナンダ (Kṛṣṇānanda) 氏の時に寺に安置したのだと言う。

市中でも格別、大きく美しい寺である。女たちの楽しみのための唯一の祭り、シュラーヴァナ月のハリヤーリー・ティージ (Hariyālī Tīj)⁽⁴⁵⁾の時には市内の女性のためにここにブランコがしつらえられる。この時には寺の内外に大きな市がたつ。

この寺ではジェーシュタ (Jeṣṭha) 月のガンガー・アヴァタラナ・ダシュヴィーン (Gaṅgā Avatarāṇa Daśavīm)⁽⁴⁶⁾の日に特別な礼拝がとり行なわれる。普段は早朝と夕刻にガンガー女神、ヴィシュヌ、そしてシヴァへのアールティー (Ārtī)⁽⁴⁷⁾等の礼拝がされるだけである。

(9) タークル・ジャガンナート・カー・マンディル (Thākur Jagannāth kā Mandir) ; 市中の大きい寺の中でもこの寺は特に重要である。この寺

は副徴税官 (Deputy Collector) のラーイバハードゥル・タークル・ジャガンナート (Rāy Bahādur Ṭhākur Jagannāth)、息子の郡長、 (Tahsīldār) タークル・ヴァルヴァターウル・スィンハ (Ṭhākur Varvatāwar Simh)、そして孫の騎馬少佐 (Risāldār Major)、サルダール・バハードゥル・タークル・ジャワーハル・スィンハ (Sardār Bahādur Ṭhākur Jawāhar Simh) らが 1906 年に建立した。元はヴィシュヌ寺院であり、他の神々の像もある。化身の信仰に従ってすべての化身像がある。非常に広い境内と大きい本堂を持つ寺である。そのため壮麗な印象を与える。一般の人々はこの寺をディプティ・サーハブ (Dīpṭī Sāhab) の寺と呼んでいる。

(10) ハーティ・ワラー・マンディル (Hāthī Wālā Mandir) ; この寺は上記のディプティ・サーハブ寺院よりもっと大きい。中には南インド様式の、もしくは最古のインド建築様式の唯一の例である大きくて広いシヴァ神の祠堂がある。これは植民地時代のあるインド人領主とタージプル (Tājpur) 藩王国の王の所有になっていた。現在はある財団が管理している。毎年、ジャナマーシュタミー (Janmāṣṭamī) の祭りの日にはラーマ、クリシュナにゆかりの芝居が演じられる。基本的にはこの場所は今日ヴィシュヌ派の信仰が中心である。あらゆる神、女神の寺院がここにはある。二体の大きい象の石像がある。そのため人々はこの寺をハーティ・ワラー・マンディル即ち象寺と呼んでいる。この寺のガルバ・グリハはシヴァの祠堂になっている。

(11) ハヌマーン・ジー・カー・チャタリー・ワラー・マンディル (Hanumān Jī kā Chatarī Wālā Mandir) ; この寺の建立の正確な年代は不明である。しかし、再建されたのは 1938 年である。マハントは 4 代目である。ラーマ信仰のラーマナンディー派 (Rāmānandī)⁽⁴⁸⁾ の一派の信徒である。ヴィシュヌ派の所有になる市中で唯一の寺である。その他の寺はすべてマハントの個人的財産になってしまっている。この寺は象寺の東正面にある。市の大部分の寺はこのカーヌンゴヤーン (Kānūngoyān) 地区、もしくはカタガル (Kathaghar) そしてキスロール地区にある。

(12) ガンガー・マンディル — ハヌマーン・ガリー (Hanumān Gaṛhī) ; キスロール地区にある大きいガンガー・マンディルについては上に述べた。この寺はハヌマーン・ガリーという名の古い聖地にある商人カマルナヤナ・カトリー (Kamalnayana Khatrī) 氏邸にある。ここには地面から高くなったガルバ・グリハ (Garbha Gr̥ha)⁽⁴⁹⁾ にハヌマーンの有名な像がある。邸内にガンガー女神の美しい像とその他の神像を奉ったガンガー・マンディルがある。建立はヴィクラマ暦 1944 年、即ち西暦 1887 年である。この 1 本の壊れた石柱にはおよそ 1500 年前の人物像が刻まれている。

(13) マハーブラフマノーン・カー・マンディル (Mahā Brāhmaṇō kā Mandir) ; その古さと、ヒンドゥーにとって葬儀が持っている根本的な必要性とから見て、この寺は特に重要である。これはカトハル (Kaṭhar) 地区にある。マハーブラフマンたちはカーストとしてはシュードラ (Śūdra)

と再生族（バラモン，クシャトリヤ，ヴァイシャ）の中間に位置する。ヒンドゥーの浄法においては、バラモン，ナーイー（Nāī = 床屋），クムハール（Kumbhār = 壺作り），カハール（Kahār = 水汲み人），マーリー（Mālī = 植木職人）が特別な役割を果す。しかし、火葬についてはマハーブラフマンたちの管轄となる。葬儀の際、バラモン僧に言われて人々の差しだすお布施その他はすべてマハーブラフマンたちのものとなる。バラモン，ナーイー，カハール，バンギー（Bhāngī = 掃除人カースト）たちは受け取らない。寺は古く、美しい。古さについては疑いが残るが、建築様式からみておよそ1000年程前のものかもしれない。昔は壁画があったが今は剝落してしまった。

(14) アスタル・カー・マンディル (Asthal kā Mandī) ; 寺に伝わる記録によると、アーサフ・ウッダウラー (Āsaf Uddaulā) 太守の時代にラージャー・バグワーン・ダース (Rājā Bhagvān Dās) の庇護をうけた。これ以前にはイスラム統治への恐れから、この寺には神像は置かれていなかった。これを見ると、イスラム支配の時代にはムラーダーバードの寺には神像は隠されていたか、それとも始めから置かれなかったかのどちらかのようなのである。この寺にはラーマ信仰の流れを汲むラーマ・ナンダ派の、額にシュリー (Śrī) ⁽⁵⁰⁾、ラクシュミー (Lakṣmī) ⁽⁵¹⁾ またはスィーター (Sītā) ⁽⁵²⁾ への信仰を表す赤い線を描いている ヴィシュヌ派の行者たちが住んでいる。ここにはアシュタダートゥ (Aṣṭadhātu) ⁽⁵³⁾ 製のラーマ (Rāma) の神像と真鍮製の像がある。広い寺の外に井戸が一つあり、その井戸の壁の上に昔石像がいくつかあった。そのために、この寺をアスタル (地面に非ざる) ・カー・マンディルと言うのである。

(15) チョウムキー・マハーデーヴァ・カー・マンディル (Caumukhī Mahādeva kā Mandir) ; これは古い寺である。ローハーガル (Lohāgaṛh) の近くの大通りにある。バードシャーヒー・バーザール (Bādśāhī Bāzār) [バルタン・バーザール Bartan Bāzār — アムローヒー・ゲート Amrohī Gate] にある。ここの寺僧はカーニーパーの信徒でナート派である。この寺には四面にシャンカラ像を刻んだシヴァ・リングがある。

(16) パンチャムキー・マハーデーヴァ (Pañcamukhī Mahādeva) ; 本来はヴィシュヌ派寺院であり、クリシュナ信仰の一派と関係がある。マハントは6代目で、ラーダー・クリシュナ寺の寺僧である。外に赤茶色の石の上に五面のシャンカラのリング像がある。そのためパンチャムキー (五面の) マハーデーヴァの名で知られている。キスロール地区にある。

(17) ラーダー ⁽⁵⁴⁾ ・クリシュナ・マンディル (Rādā Kṛṣṇa Mandir) ; ここにはアシュタダートゥ製のラーダー・クリシュナの本尊と真鍮その他の金属製の36の像がある。アスタル寺と同じく壮麗である。礼拝のためのシャーリグラーム (Śāligrām) ⁽⁵⁵⁾ も多くある。この寺の最も魅力的な像は黒い石に彩色されたクリシュナ神のものである。彩色された石像芸術の分野でこれは一つの得難い例である。これはチョウラーハー・ガリー (Caurāhā Galī) にある。

(18) チューン・チューン・カー・マンディル (Cū Cū kā Mandir) ;

この名前の由来は不明である。以前はクリシュナを信仰する一派の信徒がいたが、現在はラーダー・クリシュナ、ラーマ・スィーター、シヴァ、ハヌマーンなどあらゆる像が安置されている。古い寺ではないかもしれない。マンディー・バース (Maṇḍī Bās) 地区にある。

(19) チョウガーニー・デーヴィー・カー・マンディル (Caugānī Devī kā Mandir) ; 地元の古い県立病院の1901年の記録に、この寺を古い寺だとした記述がある。ここは昔、青空寺院があった。これはチョウラーヘー・キー・デーヴィー (Caurāhe kī Devī)⁽⁵⁶⁾ の場所であった。こうしたチョウラーヘー・キー・デーヴィーの礼拝所は市内に他にもある。有名なものでは、ナワブ・プラー (Nawāb Purā) のカハーローン・カー・マンディル (Kahārō kā Mandir) のもの、そしてチョウラーヘー・ガリー (Caurāhā Galī) 地区のものなどがある。

II ムラーダーバードのハヌマーン・マンディルとアカーラー (Akhārā)

ムラーダーバード県では4種類の方言が話されている。①カリー・ボリー (Kharī Bolī)⁽⁵⁷⁾ の土台になった地元のカタハリ (Kaṭharī) 方言②パイシャーチー (Paisācī) 語⁽⁵⁸⁾ の一派であるクマールン (Kumārūn) 地方のバーンワリー (Bhāwarī) ⁽⁵⁹⁾ 方言、③ブラジ・バーシャー (Braj Bhāṣā)⁽⁶⁰⁾、そして④アワディー (Awadhī) ⁽⁶¹⁾ である。クマールン地方とは行政上の関係があり、一方ブラジ地方はその近さのために、それぞれの地域方言の影響が見られるのである。しかし、アワディー語が用いられている唯一の原因はムラーダーバード県の大部分のカタハリ (Kaṭharī) ・カースト⁽⁶²⁾ の人たちがトゥルシー (Tulsī) ⁽⁶³⁾ の信徒であるということである。トゥルシーダースのラーム・チャリト・マーナス (Rām Carit Mānas) 以前には、この地方にアワディー語の影響はなかったにしても、その執筆によってトゥルシーはバクティ信仰 (Bhakti) の新しい姿を根づかせてクリシュナ信仰をこの地域から追いだした。今日、ブラジ語地域と端を接しているながら、われわれはアワディー語で書かれたラーム・チャリト・マーナス、そしてアヨーディヤ (Ayodhya) ⁽⁶⁴⁾ の王ラーマ、また理想と規範を体現している彼の一族の一部となっている。

バラモンの中では、サーラスヴァタ (Sārasvata) バラモンの人々を除くと大部分のバラモンは元来シヴァ派である。トゥルシーダースもシヴァ派であった。ハヌマーンへの信仰を通じてラーマに対するバクティ信仰の有名な信徒の間に地位を得た。トゥルシーダースの頃まではシヴァ—シャークタ派とヴィシュヌ派の間には互いに争いがあった。シヴァの信徒であったトゥルシーはヴィシュヌの化身であるにもかかわらずラーマを己の信仰の対象とした。その結果、バラモンたちの間で広範な変化が起った。シヴァ派とヴィシュヌ派の間の信仰の違いはそのままにしても、両者の間の敵意がほとんどなくなってしまった。なぜならトゥルシーダースはラーム・チャリト・マーナスの中でラーマの口から、「シヴァに背いて私の僕と言うものは、私の心に夢適うまじ」と言わせたからである。ヴィシュヌ派の寛大な、

また不殺生の教義に影響されて、後世の社会は「すべての神は一つ」の信仰につらなり、さらに正統ヒンドゥー教のこの信仰は今日もカーリー・ボーリーそしてその影響下にある地域にのみ見られるのである。アワディー方言のおかげでこそ、カーリー・ボーリーは国家的レベルにまで広がることができたのである。

シヴァ派はハヌマーンをシヴァの化身と信じている。シヴァ派には元來化身の信仰はないのだが、これも今日トゥルスイーの努力の結果である。ムラーダーバードのゴール (Gauṛ) ・バラモン⁽⁶⁵⁾の居住区のシヴァ寺院にハヌマーンの像が安置されているのも、まったくこれがためである。

市内にはハヌマーンを奉った独立の寺もいくつかある。この中で次の4つの寺が主だったものである。①カーヌーンゴヤー地区の象寺の前にあるラーマナンダ派のヴィシュヌ派のチャタリー・ワラー寺 (既述)。②ラームガンガー川の岸のカーリー (Kālī) 女神の寺の近く、ラール・バグ (Lāl Bāg) にあって土中から出土した古い像を安置した寺。③ダリーバー・パーン (Darībā Pān) 地区のディッリー・ワラー・ガリー (Dillī Wālī Galī) の近くのマハーヴィール・ハヌマーン・ジー・カー・マンディール (Mahāvīr Hanumān Jī kā Mandir) として④ガンジ (Gañj) のバーラージー・ハヌマーン (Bālājī Hanumān) の大きい寺である。後の三つの寺は独立後に建てられたものである。ダリーバー・パーン地区の寺はおそらく始めは特定の家の私寺であったものであろうが、今はどの寺も一般の人々のために開かれている。この四寺はすべてハヌマーンだけを奉る寺であって寺内にシヴァの祠堂はない。残りはすべてシヴァ神と結びついたハヌマーン寺である。

こうした独立したハヌマーン寺院の伝統を表わすもう一つの例がレスリングの修行場であるアカーラー (Akhārā) である。しかし、道場に奉られたハヌマーンの像の前で日々礼拝がされるということはない。毎週火曜日に行なわれるレスリングの試合のために集まった際、夕刻に礼拝がされる。市内の二つの主要な道場は次のとおりである。

- (1) カーヌーンゴヤー地区のウダースイーン・マンディール (Udāsīn Mandir) の背後にあるアカーラー；これは市内で一番大きいアカーラーである。レスリングの特別な競技大会が開かれる。
- (2) シュリー・ラール・モーハッラー (Śrī Lāl Mauhallā) にあるアカーラー；このアカーラーは市のヒンドゥー・ムスリムの争いの主要な原因の一つになっている。元來、市の大部分のマスジド (Masjid = モスク) はムスリム支配の時代に、強権でヒンドゥーを押しつけて建てられたものである。この道場にもマスジドが一つくっついている。それについてはよく知られた話がある。植民地時代に富裕な商家の青年が困っていたムスリムの妾のために、このマスジドがまったくのヒンドゥー居住区のまん中に建てられたというのである。この地区には現在もムスリムは一家族も住んでいない。このマスジドでその妾は礼拝していた。後に彼女はこのマスジドをバードシャーヒー・マダルサー (Bādśāhī Madrasā)⁽⁶⁶⁾に寄贈した。何故なら彼女はヒン

ドゥーの夫や世間を信用していなかったからである。彼女は自分の肉体と一人のヒンドゥーの財産にしか関心がなかったのである。

III ムラーダーバード市の新しい寺のいくつか

独立後インドでは寺の数はあまり増えていない。しかし、いくつか重要な寺を紹介すべきであろう。

- (1) エーカーダシー・マンディル (Ekādaśī Mandir) ; ヒンドゥー暦では毎月2度の11日は意義ある日とされている。そこでこの日女性たちは食事をとらず、ヴラタの誓いをして参詣にくる。この寺はラームガンガー川の岸の近く、カタハルのバドラー (Bhadaurā) 地区内のリシクル・パリサル (R̥sikul Parisar) にある。建立は1964年である。
- (2) マノーカームナー・マンディル (Manokāmnā Mandir) ; 心の願い (Manokāmnā) が叶うようにと人々はこの寺にお参に来る。この寺は古いバルワーラン・ジャナジャティ地区にある。建立は1960年である。
- (3) サントーシー・マター・カー・マンディル (Santosī Mātā kā Mandir) ; サントーシーはプラーナ文献中、シャンカラの息子ガネーシャ (Gaṇeśa) の娘の名とされる想像上の名前である。毎週金曜日に女たちはこの女神のために断食の誓いをたてる。ヴラタを終えると女神への祈りを完うするために、娘たちに奇数の菓子を配る。このヴラタを守る家庭では金曜日には酸味のある食物は口にしない。毎週金曜日に、ひよこ豆、粗糖がお下がりに (プラサード) として配られる。ラール・バーグのラームガンガー沿いにある。15年程前に建てられた。
- (4) ライダース・マンディル (Raidās Mandir) これは、ヒンドゥー社会の不可触民制を念頭において、チャマル (Camār)⁽⁶⁷⁾・カーストの人々が自分たちの居住区ブーラー (Bhūrā) におよそ15年程前に建立したものである。
- (5) バールミーキ・マンディル (Bālmīki Mandir) ; バールミーキという語はバンギー、マハタル (Mahatar) もしくはドーム (Dom) と呼ばれる不可触カーストの人々について使われる。ガーンディー・ジーはあらゆる不可触民を神の子、ハリジャンと呼んだ。バールミーキたちはまったくのシェードラであって、溝掃除などの仕事をする奉仕階級の人々である。ヒンドゥーの不可触思想が原因で、彼らは12年程前、市内に寺を三つ建立した。このカーストの人々にとってマハートマー・ガーンディーは、ちょうど他の社会の人々にとってキリストやマホメットが持つのと同じような意味合いを持っている。

IV ムラダーバード市のヤジュナシャーラー (Yajña Śālā)⁽⁶⁹⁾

ムラーダーバード市ではヤジュナシャーラーの伝統的なそして現代的な両方の姿を見ることが出来る。シヴァハラー・ゴヴィンド (Śivaharā Govind) 地区の、今のカタハルの中央、パチャペラー (Pacaperā = 五本の木に囲まれた場所) という名の場所に伝統的な姿を保った市で最も古

い祭壇がある。古い祭壇を少し高くして新しく作り直したものである。しかし、再建の際、元の部分を壊したり、取り除いたりはしていない。もとの祭壇は旧式小形レンガ造りである。従ってインド史のラージプート時代、即ち紀元8世紀から12世紀の間にこの祭壇が築かれて、カタハル地域で供儀が行なわれていたことは明らかである。

- (1) バイラヴァ・マンディル (Bhairava Mandir) —— ラマサーン (Ramasān) ; インドのタントラの伝統中の有名な主人公アーナンド・バイラヴァ (Ānand Bhairava)⁽⁷⁰⁾ のタントラの行法を修める市の唯一の場所である。ここに火壇 (Agni Vedī) が一つあるが、供儀の祭壇 (Yajña Vedī) とは言えない。にもかかわらず、タントラの行法の一つであるアグニ・プージャー (Agni Pūjā) の主要な場所の一つである。毎年、チャイトラ月とアーシュヴィン (Āśvin) 月のナヴァラートリ (Navarātri) の時期には正統派ヒンドゥーの家庭ではどこでもヤジュナがとり行なわれるが、この寺ではその後でバラモンへの饗応がなされる。ホーリー、ディーパーワリー (Dīpāwalī)⁽⁷²⁾ の際にも、ダーキニー (Dākinī)⁽⁷³⁾ そして、ピシャーチー (Piśācī)⁽⁷⁴⁾ という名のタントラの女神たちをアゴーリー (Aghorī) 派⁽⁷⁵⁾ の人々は礼拝する。現在はバラモンへの饗応は非常に小規模なものになっている。
- (2) カーリー・マーン・カー・マンディル (Kālī Mā kā Mandir) ; ラームガンガー川沿いの大きくて古い寺である。マハーシャクティ (Mahāśakti)⁽⁷⁶⁾ の祭壇 (Piṇḍī) が地面にあって、その礼拝のために毎日早朝と夕方、人々がお参にくる。毎年、チャイトラ、アーシュヴィン月のナヴァラートリの九日間、それぞれマハーデーヴィーの祭儀がここで行なわれる。チャンディー・パート (Caṇḍī Pāṭh)⁽⁷⁷⁾ の読誦のためにこの公開の供儀に一般のヒンドゥーも参加する。九日目に荒碾き小麦 (Sūjī) のハラア (Halua)⁽⁷⁸⁾ がプラサードとして配られる。寺内にはトゥルスィー・チョウラー (Tulsī Caurā)⁽⁷⁹⁾、シヴァの祠堂、そしてヴァースデーヴァ (Vāsudeva)⁽⁸⁰⁾、ハヌマーン他の神々も奉られている。
- (3) ミシュリー・ギリ・カー・ティーラー⁽⁸¹⁾ (Miśrī Giri kā Tīlā) ; このティーラーにはマハーカーリー・アーディシャクティの大きい土製の像が昔から安置されている。この像は中空になっていて、19世紀までこの像の腹腔とカーリー・マーン寺とはトンネルを通じてつながっていた。人間が一人、このトンネルを通して像にひそんで神のお告げと称して信者を恍惚とさせていた。信者は頭を垂れて、神の御力を目のあたりにして自分たちの願い事が叶うものと信じた。アーリヤ・サマージ (Ārya Samāj)⁽⁸²⁾ の創設者ダヤーナンド⁽⁸³⁾ は、こうした芝居がかった礼拝方法を暴露して、サティヤールタ・プラカーシャ (Satyārtha Prakāśa)⁽⁸⁴⁾ の中で絵解をしてみた。この寺は小高い丘の上にある。言い伝えによると、昔、ナーガー (Nāgā) 派⁽⁸⁵⁾ の代表的一派であるダシャ (Dasa) 派の行者たちが住んでいたらしい。彼らの礼拝のための火壇が現存している。シュリー・ミシュリー・ギリという名のナーガー派の行者が19世紀の始めに、ここにマハー

カーリーの像を安置した。寺内にはたくさんのシヴァの祠堂 (Śivālaya) と一体のバイラヴァの像がある。中心的なシヴァラヤには市内の他のシヴァラヤと同じ様にハヌマーンの立像が奉られている。おそらく例年、二ヶ月の (チャイトラ月、及びアーシュヴィン月のことか? 訳者註) 合わせて18日間に、およそ4万ルピーの金、銀の装身具や現金が奉納される。この他に、寺の毎日の収入として賽銭の形で約50ルピー程が入る。さらに、菓子、布、女神への捧げ物として金、銀の装身具なども納められる。

この寺の建物 (Bhavan ヒンドゥー教では女神の住まいをバヴァンと呼ぶ) にはマハントのもとに10人の人間が働いている。時々、外からナーガー派のダシャナーミー派行者たちがやってくる泊まっていく。夕方、早朝のアールティの時の火をこの寺の火壇にくべる。こうして火壇は常にちろちろと火が燃えている状態にしておかれる。参詣人や行者たちはこの火壇のドゥーニー (Dhūnī) と呼ばれる神聖な灰を体に塗ったり、ティラク (Tilak) ⁽⁸⁵⁾ 用に使ったりする。

この寺に神像を安置したシュリー・ミシュリー・ギリはシャーハ・ブラッキー・サーハブ (Śāh Bulākī Sāhab) の同時代の人だと伝えられている。市内に火の祭壇は他にもごく小さい寺にいくつかあるが、一般の人が参拝するという点では以上に紹介した場所が重要なものである。

V ムラーダーバード市のマト (Math)

ムラーダーバード市にはマトとしての機能が中心になっている昔からの古い礼拝所が現在も残っている。これらのマトは礼拝という点から見て重要なものである。女神の住いをバヴァンと言うように、優れた才能に恵まれた、行ないの正しい理想的な女性が亡くなると、ある神聖な場所が彼女たちを奉るために祭壇として選ばれる。そこに一本の柱、または半円、円錐形の平屋のガルバ・グリハが建てられる。この内部には像は何も置かない。この他にも、どこか、何か自然の災害などで神の怒りが下ったところなどに礼拝のためにマトを建てたりする。市で主要なマトは次のとおりである。

(1) マナサー・デーヴィー・カー・マト (既述のため省略, I - (2) 参照 訳者註)

(2) ジャールカンディー・カー・マト (これも I - (7) で紹介されたジャールカンディー・カー・マンディルと同じ寺を指しているものと思われるが、必ずしも重複している記述ばかりではないので訳出する 訳者註) ジャールカンド・マハーデーヴァとは一般の市民にとってはアーディデーヴァ・シャンカラのことである。従ってジャールカンディー・デーヴィーと言う時、それはアーディシャクティのシヴァ (Śivā シヴァの女性形) 即ちパールヴァティー (Pārvatī) 女神を意味している。毎年、チャイトラ、アーシュヴィン月のナヴァラートの九日間、女神への供儀がとりおこなわれる。カーメーシュワルナート寺、そしてミシュリー・ギリ・カー・ティーラーと関係のあるカーリー寺と同じ様に、信心深い市民や近郊の住民が自分の願い事が叶うようにと参詣にやってくる。信じられている所では、この寺の女神

の祭壇の前に毎日夕刻に欠かさずギー (Ghī = 精製バター) の灯明をともしばまちがいなく満願成就することのことである。たいてい男も女も 40 日間のこの行を完うすることができないようである。

- (3) ナトワル・バーバー・カー・マト (Naṭwar Bābā kā Maṭh) ; この場所は市の南のチャーワニー (Chāwanī) 地区にある。場所は古いが、ナトワル・バーバーという男性の名が冠せられていながら、何故マトと呼ばれるのか不明である。マトではなくマリー (Maṛhī) と呼ばれるべきであった。もっともこのマトは、市のナート派によってチャーリー (Chaṛī)⁽⁸⁸⁾ の行が行なわれる場所と関係している。そこでは毎年、ナート、ヨーギー派の伝統に従ってチャーリーの集会在ナーガパンチャミーの日に開かれる。⁽⁸⁷⁾

このマトは、チャーワニー地区の、シヴィル・ラインズの鉄道職員居住区にある、県警察本部 (Divisional Superintendent Office) の前の R. P. F. (Railway Police Force 鉄道警察隊) の昔の駐屯地にある。独立以前は人気のない所であった。昔から人々はこのマトをバーバー・ナトワル、別名メヘターブ・チョウダリー (Mahtāb Caudharī) のマトと呼んでいる。願いが叶うようにと人々はチラム (Cilam)⁽⁸⁹⁾ に大麻を載せて奉納する。今では、まわりに家が建て込んできたためと、社会の進歩のためとで、この大麻やチラムを供える風習は良くは思われなくなり、殆んど見られなくなってきた。寺にはいくつかの、新しく美しい像も安置されている。本来のマトは今も柱の形で残っている。その近くにシヴァの祠がある。大きな通りが通じたために参詣人は再び増え始めている。

- (4) ジュワラー・ジー・カー・マト (Jvālā Jī kā Maṭh) ; カジャリー・サライー (Kajarī Sarāy) 地区にある。市には昔、カッジャル (Kajjal) という名前のカーストの人々が住んでいた。この人たちは TENT を担いで穀物の行商を業としていた。本来の職業は象使い (Pīlwān) であった。手の空いた時には、動物の臄や、クシャ草や小枝で、家庭で使う小物、箕などを作っていた。ムラーダーバードは開ける以前はディーク (Dīkh) という名の草や竹の密生しているところだった。ムラーダーバードは象が住んでいたカジャリーの密林の一部であった。

カジャリー・サライーのこのマトは古い寺として昔からあった。現在は再建されてアーディシャクティやその他の多くの神像が安置されている。マト本来の姿は隠れてしまった。人々は寺にくると変わらぬ様子で参詣に来る。

ジュワラー・ジーとはシャクタ派におけるアーディシャクティの三つの始めの姿、即ちブラフマーニー (Brahmāṇī) , ヴァイシュナヴィー (Vaiṣṇavī) そしてパールヴァティーが融合した始源の姿アグニの名前である。カシミール地方のある山にジュワラー女神の本来の住まいがある。そこは山の頂上から火が噴き出ている。地理学上、火山と言われるところである。昔はカシミールのような遠い所へ誰もが参詣に行けるものではなかった。そこで、その山から火を取ってきて、火壇にジュワラー・ジーの火を置いて絶やさぬように燃やしておいたのである。現在は、この火壇は常に火が燃えているわけではない。

この寺にはよくアグニ・アカーラー派の行者たちがきて泊まっている。インドのサードゥ(Sādhu)たちの中ではナーガー派のガーヤトリー・アカーラー (Gāyātrī Akhārā) とアグニ・アカーラーは特に重要である。この派の中心はベナレスにある。

(5) サティヨーン・ケー・マト (Satiyō ke Maṭh) ; 市のチャーワニー地区の南方、ラームガンガー沿いのバングラー (Baṅglā) 村にサティー (Satī) たちの神聖な土地がある。ここには今日まで、旧式小形レンガ造りの八つのマトがよく保存されて残っている。人の話ではここには 40 のマトがあるそうである。17 だという人もいる。事実、今から 15 年程前にはおよそ 15 のマトがあった。それをこのの住民たちが自分の住居用にマトのレンガを使ったり、またそこに住みついたりしたのだった。インド史におけるラージプート時代 (8 c ~ 13 c) は勇敢な貞女 (サティー) たちの時代であった。おそらく、これらのマトも皆、何かの大戦争のなごりであろう。記録は残っていないものの、その戦いでラージプートの女性たちがきつと集団で殉死 (Jauhar) をしたのであろう。インド史上、最初の大文学マハーバータについて、北インドのもう一つの長編文学作品アールハー・カンド (Ālhākhaṇḍ) ⁽⁸⁹⁾ にはムラーダーバードが戦場になったラージプートの戦いの記述が見える。当時は、ここはラクノール・ガル (Lakhnaur Gaṛh) と言われていた。この戦いの中にはムラーダーバード市の王ジャードーン (Jādō) との戦いについても言及されている。

これらのマトがどの教派の所属かははっきりしないが、マリー (Mālī) たちが管理している。そして、一年 2 回のナヴァラートリの時、サティーたちの礼拝が行なわれる。

VI ムラーダーバード市のラームガンガー川岸のガート (Ghāṭ)

インドの文化では自然は神の姿の顕れと考えられてきた。すべての現象はブラフマの姿をかいま見せている。中でも川は特に重要である。北インドでは、ブラフマプトラ (Brahmaputra) , ガンガー (Gaṅgā) そしてシンドゥ (Sindhu) の三川がインド亜大陸におけるヒマラヤの境界をインドに有利に定めている。ガンガー川はヒマラヤの中央から流れ出している。これら聖なる三川の源流はチベットのマーナサローワル (Mānasarowar) 湖だと考えられている。

ガンガーという語はインド文化の神聖さの代名詞である。インドにはガンガーという名のついた川が多くある。パラシュラーム (Paraśurām) ・ガンガー、バーナ (Bāṇa) ・ガンガー、バヴァ (Bhava) ・ガンガー、バーギーラティー (Bāgīrathī) ・ガンガー、カウシーケーイ (Kauśīkey) ・ガンガーなどは中でも重要である。バーナ・ガンガーという名前の川はインドにたくさんある。カシミールのジャンム (Janmū) 地方、ガルワール (Gaṛhwāl) , ムラーダーバード、ビハールそしてアッサムにもこの名のついた川がある。おそらく弓 (Bāṇa) を使用する文化の名残りであろう。カウシーケーイ川もクマールユーンとビハールにある。パラシュラームガンガー

の現在の名前がラームガンガーである。これはパールミーキ作ラーマヤナ中、ウッタラガー (Uttaraḡā) という名で触れられている。源はクマールーンの山中である。ムラーダーバードでデーラー (Dhelā) という名のもう一つのクマールーンから流れてくる川と合流する。

ラームガンガー川はパラシュラーマの名と関係がある。毎年、パラシュラーマ生誕祭⁽⁹⁰⁾がバラモンたちによって行なわれる。ラームガンガー川への讃歌も歌われる。パラシュラーマはブリグ (Bhṛgu) 族の出である。彼はクシャトリアたちを憎んでいた。ガンガー川はバーギーラタ (Bhāḡīratha)⁽⁹¹⁾ という名のクシャトリアによって地上に招来された。そこでパラシュラーマにとっては、クシャトリアの力によって持たされた川、即ち、ガンガー川で沐浴することは自分の誇りが許さなかった。そのため、ラームガンガーという名の川を代わりに選んだ。この川の岸の、今のパルサー・ケーラー (Parsā Kherā) という場所にパラシュラーマは道場を建てた。ドローナ (Droṇa)⁽⁹²⁾、ドゥルパダ (Drupada)⁽⁹³⁾、ビッシュマ (Bhisma)⁽⁹⁴⁾ としてクリパーチャールヤ (Kṛpācārya)⁽⁹⁵⁾ 等もここで修行したのである。

昔のブリグブルの地であるムラーダーバードにはラームガンガー川沿いに多くのガートがある。結婚式の後、新郎、新婦はガンガーに礼拝するためにやってくる。今もラームガンガー川の岸には多くの宗教施設やガートが建設されている。リシクラ、ジャーマー・マスジド、スンドル (Sundar) ・ガート、グル (Guru) ・ガート、ウダーシーン (Udāsīn) ・ガート、ラーニー・キショーリー (Rānī Kīśorī) の男性用そして女性用ガート、ラール・バーグのシュリー・ラームガンガー・デーヴィーのガート、カーニーパー・キー・ガティヤー、マッラーハ (Mallāha) ・ガート、ダスワーン・ガートなどが川の南岸に連なっている。重要なガートのいくつかを次に紹介する。

- (1) カーニーパー・キー・ガティヤー；市の最も古いガートである。ナート派の伝統を伝える場所である。現在は、カーニーパー・キー・ガティヤーのラーダークリシュナ寺院の名で、ある団体が管理している。この土地に付属する家作や畑といった形の財産もある。ゴパール・ダース (Gopāl Dās) マハントの死後、反社会的分子が犯罪行為のために、ここをのっとなったことがあったが、6、7年前から、団体を通じて市の社会活動家ネートルパール (Netrpāl) 氏、青年活動家ラメッシュ・チャンドラ (Rameś Candra) 氏の協力によって正常化された。現在は毎週火曜日に集り (Satsaṅg) が開かれている。サンスクリット学校と図書館が開設されることも決まった。
- (2) シュリー・ラームガンガー・デーヴィー・ガート；上記のガティヤーの先のラール・バーグにあるレンガ造りのガートである。以前は由来のはっきりしない井戸が24～5程水中にあった。危険防止のために今から30年程前に井戸の上にレンガでガートを建てたのである。ラームガンガー女神は七人姉妹であったと伝えられている。六人は結婚したが、ラームガンガーは未婚のままであった。もし誰か新婚夫婦が互いの衣服のすそを結び合っただまラームガンガーを渡ろうとすると、舟が沈んでしまうという言い伝えがあり、

そのため今も夫婦でそろって川を渡ろうとはしない。今ではこの迷信も次第に忘れられつつある。それでも毎年ガンガー・ダシャハラ（Gaṅgā Daśaharā）⁽⁹⁶⁾やカールティカ・プールニマー（Kārtika Pūrṇimā）⁽⁹⁷⁾には一、二件の犠牲者は必ずずるのである。ラームガンガー女神を奉るためにガートの建設と同時に、1950年もしくは51年にガート上にシュリー・ラームガンガー・マンディルが建てられた。

- (3) ラーニー・キショール・ケー・ガート（Rānī Kiśor ke Ghāt）；これは1857年の後、ムラーダーバードのラージャー・グル・サハーイ（Rājā Guru Sahāy）の妻のキショーリー・デーヴィーが、カビール（Kabīr）寺の外に男性用と女性用とにそれぞれ建てた二つのガートである。礼拝のための場所は何もない。
- (4) ガンガー・マンディル・ガート；グル・ガートとスندگان・プジャーリー（Pujārī）のガートとは互いにくっついている。そこにガンガー女神の寺がある。このガートはウダーシーン・マンディルのガートの近くにある。

VII ムラーダーバード市のジャイナ教の宗教施設

① チャイティヤラヤ（Caityālaya）⁽⁹⁸⁾

ムラーダーバード市にはジャイナ教の伝統に従って家庭内で礼拝が定期的に行なわれているチャイティヤラヤが二ヶ所ある。一つはシヴィル・ラインズに新しく建てられたシュリー・スマティ・ナート・ジャイナ・シュヴェーターンバラ・マンディル（後述）の西に、かつての植民地時代の大地主かつ豪商であった一家の家にある。もう一つはシヴィル・ラインズのすぐ近くの植民地時代からの居住区カトララー・プーラン・ジャート（Kaṭrā Pūran Jāt）のある富豪の家にある。これらのチャイティヤラヤでは家族、また客人たちによってジャイナ教の信仰にのっとして礼拝ができるような設備が整っている。一般の人たちが礼拝することはできない。

チャイティヤという言葉には多くの意味がある。メーガドゥータ（Meghadūta）⁽⁹⁹⁾の詩にもこの言葉が使われている。いろいろな注釈家がいろいろに説明している。マッリナータ（Mallinātha）⁽¹⁰⁰⁾は街路樹の意に解している。バッラバ（Ballabha）はブッダーラヤ（Buddhālaya）即ち仏教寺院としている。何人かの注釈家はインド菩提樹のような樹木、または寺と解釈している。もっとも、ジャイナ教、仏教共にインドではヒンドゥー教ヴィシュヌ派の一派だと考えられているが。

チャイティヤはサンスクリット語のチター（Citā）もしくはチティヤ（Cityā）が語源だと言われている。意味は遺体を焼く所である。古代では、秀れた、また年老いた人の葬儀は川のガートか道の端で行なわれていた。そしてそこにインド菩提樹かその他の神聖な樹木を植えた。これらの語源に従えばチャイティヤの意味は神聖な宗教的樹木ということになる。

チャイティヤの語は紀元前6世紀、仏教、ジャイナ教が誕生した時代に特に広まった。仏陀もこうした聖樹の下で悟りを得たのであった。ジャイナ教

の祖師 (Tīrthāṅkara) たちも同様の木の下で正覚を得てきたのである。両派の間で、この言葉は定着した。一部の誤解から仏教徒の間ではチャイティヤの代わりにバウッダーラヤ (Bauddhālaya = 寺院) またはビハールという語が使われるようになった。ジャイナ教徒の間では、出家をもてなすための場所をチャイティヤラヤというようになった。一方、正統派ヒンドゥー、殊にヴィシュヌ派の間では、今日もヴィシュヌ神の足跡のあるインド菩提樹の下に壇 (Cabūtarā) もしくは休息所がしつらえられている。こうしたところで人々が揃って御先祖を礼拝するしきたりである。

② ジャイナ・マンディル

市中にはチャイティヤラヤの他に三つのジャイナ・マンディルがある。市には白衣派と空衣派⁽¹⁰¹⁾の両方の信徒が住んでいる。

- (1) シュリー・パールシュヴァ・ナート・ディガンバラ・ジャイナ・マンディル (Śrī Pārśva Nāth Digambara Jaina Mandir) ; この寺は市の最も古い地区であるデーンダール・プラー (Dendār Purā) の近くのカタハリヤー・ラージプートたちの昔のローハールガル (Lohārgal) 地区、現在のローハールガル (Lohagarh) にある。市に残っている他の像と比較してみると、この寺の像が本市で最古のものである。八体の石像がある。光輪 (Prabhā Maṇḍal) が上についている。白い石製である。これらの像すべてに関係している祖師の名と製作年代が刻まれている。大きい像はアチャラ・デーヴァ・チャンドラ・プラブ (Acala Deva Candra Prabhu)⁽¹⁰²⁾ のもので、1900年に作られた。最も古い像は西暦1480年、ヴィクラマ暦1507年と1548年のものである。マハーヴィーラ (Mahāvīra)⁽¹⁰³⁾ の二体の像は西暦1918年と1943年のものである。

このジャイナ寺院には四体の金製の像がある。技法の点から像の一つは特に重要である。陰彫りの技法により、中空の枠組みだけになっている。それ以外の像は皆、蓮華座像である。

寺の本堂のまわりの廻廊は長く、内部の天井には美しい壁画が描かれている。寺の構造から見て、何度か改築された形跡がある。像の足元の基壇の部分に祖師の象徴である獅子、月、法螺貝などが描かれている。寺は東面している。毎日、参詣にくる信者たちは白いドーティー (Dhotī=腰布) とパッター (Paṭṭā=肩掛け) を身に付けて、八種の品で礼拝をする。八種の品 (Aṣṭa Dravya) とは、井戸水、白檀、生花、食物、椰子、灯明、香そして果物のことである。

- (2) シュリー・スマティ・ナート・ジャイナ・シュヴェーターンバラ・マンディル (Śrī Sumati Nāth Jaina Śvetāmbara Mandir) ; 近代的建築の点では一見の値打ちのある寺である。伝統的なジャイナ様式の影響が明白である。建立は1977年。本尊はシュリー・スマティ・ナート⁽¹⁰⁴⁾の像である。およそ1メートル程の高さの銀の彫刻をほどこした獅子座がある。寺内にはパールシュヴァナート (Pārśvanāth) などの像もある。市のシヴィル・ラインズにあるこの寺は白衣派の唯一の礼拝所である。

- (3) ディガンバラ・ジャイナ・マンディル (Digambara Jaina Mandir)

——ジャーラール (Jiyālāl) 地区 ; 言い伝えではこのジャイナ寺は最も古いと言われている。これは市のラージプート時代のマンディー・バースインハ (Maṇḍī Bāsusimh) 地区にある。非常に美しい金と石の両方の像があったそうであるが、数年前に盗難に遭い、寺は経済的打撃を受けた。現在、寺は再興されて、定例の集会やヨーガ教室が開かれている。

(原著者注) 本市には二派のジャイナ教徒がいる。本来のジャイナ教徒がその一つで、一般にはサラヴァギー (Sarāvagī) と呼ばれている。この語はシュラーヴァカ (Śrāvaka = 出家) の訛である。もう一派は、自分の名前にジャイナという名を付けてはいるが、ジャイナ教とヒンドゥー教とを区別なく信仰している人たちである。彼らはヒンドゥーと同様にバラモン、クシャトリヤ、ヴァイシャ階級に分かれている。こうしたジャイナ教徒の大部分はヴァイシャ階級に属している。

VIII ムラーダーバード市のサント派各派の伝統とその宗教施設

①カビール派

仏陀の後、インドにおいて彼に匹敵する全人格を体現したのは大聖カビールダース (Kabīrdās)⁽¹⁰⁶⁾ であった。カビールはベナレスのラハルターラー (Lahartārā) 池の岸で私生児として拾われたと伝えられている。織工 (Julāhā) の家で養育されたために、彼も生活のために同じく織工となった。一方で世を超越した神の力の名のもとに寺やマスジドで人を偽る偽善者たちをサント・カビールダースは痛烈に非難した。仏陀に続いて、歴史上、不可触民の救済という偉大な仕事をしたのはカビールただ一人であった。サハジャヤーナ (Sahajayāna)⁽¹⁰⁷⁾ をしてナート派の行者の大部分は不可触民カーストの生まれであった。サハジャ乗の行者サラハパード (Sarahapād) は言った。「バラモンはブラフマー神の口から生まれたそうだが、そうだとすると既に昔のこと。今では他の人間と同様にして生まれるからには、バラモンのバラモンたる所以は如何に」と。下位カーストに生まれ、他人に軽んじられたことから、カビールは信仰を得たのである。人生の苦しみと劣等感が彼を改革者にしたのである。ムラーダーバードにはカビール派 (Kabīr Panthī) の寺が二つある。

(1) カビール・マンディル (Kabīr Mandir) —— パトパル・サライー (Patpar Sarāy) ; 寺は古い。伝統的ヒンドゥー社会の不可触思想の犠牲者であるカッジャル、ピアール、ジュラーハー、バルブーンジャー (Bharbhūjā)⁽¹⁰⁸⁾、ブルジー (Bhurjī) のような下位カーストの人たちの居住区にある。カビールダースのビージャク (Bījak)⁽¹⁰⁹⁾ が彼らのいわばグル・グラント (Guru Granth)⁽¹¹⁰⁾ である。サーキー (Sākkī)、サブド (Sabd) をしてラマイニー (Ramainī) の朗唱がこの寺の毎日の礼拝である。不可触民問題についての集会がよく開かれている。

(2) カビール・マンディル —— カーヌーンゴーヤーン地区 ; 市には古くからの左道シャクティ派の一派が住んでおり、人々は彼らをアゴリー (Aghorī) と呼んでいる。これはタントラ一派で普通はシャクタ派であり、

クンダリー・サンチャーラン (*Kuṇḍalī Saṅcālan*)⁽¹¹¹⁾、そして、チャクラ・ギヤーン (*Cakra Gyān*)⁽¹¹²⁾の行法を修している。人々はこれらをジャー・プーンク (*Jhār Phūk* = 呪い, 呪術) と言っており、病気除けや悪霊払いの行法に通じているこの派の人々をシヤール (*Siyār*)と呼んでいる。この人々は悪霊の怒りを静めるためにニームの木の枝でお払いをしたり、病者の首にパルチャーイー (*Parchāī*) という名の木の葉を結ぶためにやったりする。パルチャーイーの葉を首や腕に巻いておくと、災いから守られる。最近では上位カーストの人々もこうしてもらっている。

この寺の古い建物にある塔から観て、この寺が左道シャクティ派による五つのマの字 (*Pañcamakāra*) の行法の場所であったことはおそらく間違いないであろう。寺の外面の彫刻は愛欲の場面のこうした野卑な姿を描いている。広い境内と一つの庭園、そしてラームガンガー川の岸に建てられた女性用、男性用の古いガートは愛欲のための場所を提供してきている。この寺の所有になる村がいくつかあり、そこからの収入で寺は運営されている。信者は誰でもマハントの許可を得れば、一晩泊まって無料で食事をとることができる。しかし、一晩以上泊まることはできない。このように、この場所もカビールの思想から遠く離れて、個人の私有財産ようになってきている。

このカビール寺のおかげで、19世紀からカビール派は一種のささやかながら有力者の保護を受けてきた。1857年の独立運動の際、市の裁判所の高官であったクシャトリヤでジャート (*Jāt*) ・カースト⁽¹¹³⁾のグル・サハーン (*Guru Sahāy*) という名の人物が、反乱軍に対抗してイギリス人を助けるために、利己主義者で欲に目が眩んだ連中を集めて、イギリス軍の指導のもとに市の西部を征圧した。彼はイギリス人によって、当時こうした国賊に与えられたラージャーという称号の榮譽を得た。グル・サハーンの妻はキショーリー (*Kiśorī*) と言ったが、夫がラージャーとなって、ラーニー (*Rānī* = 妃) ・キショーリー・デーヴィーと呼ばれるようになった。子供がいなかったのでこの夫婦は寺の管理に興味を持った。彼の征圧した市の地域の境がちょうどカーヌンゴヤーンのこの寺までであった。そういうわけでカビール派の礼拝所であったこの寺が突然、有力な保護を受けるようになった。当時のマハントに帰依していたために、キショーリー・ラーニーはマハントの死後、赤い石造りの、天蓋のついたラージプート風の一部屋の建物を建て、ニルグン・サント派の伝統に従ってマハントの下駄を安置した。ラーニー・キショーリーの庇護を受けた場所であることから、人々はこの寺をラーニー・キショーリー・カー・マンディルの名で呼んでいる。

寺の塔のある部分の下の広い部屋にビージャク・グラント (*Granth*) が師の代わりに置かれている。サント派の信仰に従って信者は頭にハンカチなどの何か布を巻いて師である書物の前に額づいている。無属性のブラフマに対するカビールの祈りの言葉を詠唱しつつ、毎日、早朝と夕刻に礼拝と集会が開かれている。毎週火曜日、早朝から午前10時までには特別の集会が開かれる。

② ナーナク・パンティー (*Nānak Panthī*) ・サント派

カビールに続いてインド文化史上、その人格によって強い影響を及ぼしたのはグル・ナーナク・デーヴァ⁽¹¹⁴⁾であった。彼は北インドのあるクシャトリヤの家庭に1469年、現パーキスターンのタルバンディー (Talbandī) という村に生まれた。現在、この場所はナナカーナー・サーヒブ (Nanakānā Sāhib) の名で知られている。カビールと同様に、グル・ナーナクもムスリム、ヒンドゥー双方に愛されている。グル・ナーナクのサントとしての理想的姿を土台にニルマル (Nirmal) 派が築かれた。この派の人々は在家、出家にかかわらずマハントになることができる。グルドゥワラー (Gurudwārā) の伝統はこの派の賜物である。ナーナクの弟子たちが唯一のブラフマの名においてサントの信仰をひろめたところは、すべてグルドゥワラーと呼ばれた。ムラーダーバード市にもこの派の礼拝所が一ヶ所あり、シュリー・ニルマル・アーシュラムと呼ばれている。

(1) グルドゥワラー・ニルマル・アーシュラム (Gurudwārā Nirmal Āśram) ; これはカトガルのグラブ・バーリー (Gulāb Bārī) という名前の地域にある。このニルマル・アーシュラムは1930年に修行者のサント・シュリー・ソーハン・スィンハ (Śrī Sohan Simh) 氏が建てた。彼はパンジャーブの人でこのアーシュラム内に建てられたグルドゥワラーのマハントでもあった。現在、ここのマハントのシュリー・バガト・スィンハ (Śrī Bhagat Simh) 氏は妻帯している。このあたりは昔は寂しい場所であったが、今はここも都市開発計画によって人口が増えつつある。市の鉄道の支駅カトガルの近くにある。建物はヒンドゥー寺院に似て塔が中心になっている。現在はグル・グラント・サーヒブだけが奉られている。その中に、ナーナク、カビール、ライダーズ等すべてのサントたちの言葉がおさめられている。グル・ゴヴィンド・スィンハ (Guru Govind Simh)⁽¹¹⁵⁾ がスィク派 (Sikh Mat) の基礎を築く以前は師の教えと神の名を唱えていただけだったが、次第にスィク派と同様にサントたちの詩の詠唱がされるようになってきた。今もこの派ではグルドゥワラーの管理をする人をマハントとしか呼ばないが、一方スィク派のグルドゥワラーでは責任者のことはグランティー (Granthī)⁽¹¹⁶⁾ と呼んでいる。

ここでは無形のブラフマへの礼拝がグルグラント・サーヒブの前で、早朝と夕刻、献灯をして行なわれる。現在は頭に布をかぶり、額づくしきたりである。スィク派と同様に早朝、夕刻にグルグラント・サーヒブの読誦が行なわれる。

② ナーナク・パンティー・スィク・マト

スィクという語はシジュヤ (Siṣya=弟子) の訛である。ナーナク・デーヴァの弟子の中でヴェーダンタを實際面において教示したグルたちは10人いる。これらのグルたちは世俗の執着を断つことを説いたが、それは決して誰かが教団を弾圧しても目をつぶり不正を耐え忍べということではなかった。最高の教えでありながら、ヴェーダンタの伝統にはこの忍耐心の名において過去幾多の大きな誤ちがなされてきた。そのため、一般の人々にとってダルマは遠いものとなってきた。この誤りの反動と匡正のために、剣を掲げ

た第10代グル、シュリー・ゴヴィンド・スィンハによってスィク教の土台が築かれたのである。彼より前、ナーナクの信徒たちは名前の最後にダースとかチャラン (Caran = 足下) とかいう言葉をつけていた。ゴヴィンド・スィンハは自分に対する誇りを持つようにと初めて名前の後にスィンハ (獅子) という語を広めた。

彼以前はナーナクの教えと師弟の伝統を非常に重んじたが、ゴヴィンド・スィンハは、ナーナク、アングド・サーヒブ (Angad Sāhib = 第二代グル)、アマルダース (Amardās = 第三代グル)、ラームダース (Rāmdās = 第四代グル)、アルジュン・サーヒブ (Arjun Sāhib = 第五代グル)、テグ・バハドゥル (Teg Bahādur = 第九代グル)、ナムデーヴァ (Nāmdēva)⁽¹¹⁶⁾、ラヴィダース (Ravidās) ダンナージー (Dhannājī) サドナージー (Sadhnājī)、パラマナーンド (Paramānand)、ヴェーナージー (Veñjī)、そしてシェーク・ファリード (Sekh Farīd) ら、多くのサントの言葉を集成して神聖なグル・グラント・サーヒブを編集した。昇天する前に彼は師弟の伝統をたち切り、シュリー・グラント・サーヒブを自分の後継者として大衆の前で遺言した。その時以降、スィク教徒たちの間では、師の代わりにグルグラント・サーヒブのあるところ即ち、グルドゥワーラーというしきたりが広まった。

スィク教にはいくつかの分派ができた。ムラーダーバードにはその内次の二派があるだけである。アカーリー (Akālī)⁽¹¹⁷⁾ とナムダーリー (Nāmdhārī)⁽¹¹⁸⁾ である。しかし、グルドゥワーラーを持っているのはアカーリー派によって運営されているグル・スィンハ・サバー (Guru Simh Sabha) という一つの団体であり、それが市内の二つのグルドゥワーラーを管理している。一つはハイレート・ロード (Hailet Road) にあるグルドゥワーラー、シュリー・グル・スィンハ・サバー。もう一つはラール・バークのラームガンガー岸にあるグルドゥワーラーである。この他にも二つのグルドゥワーラーがアーダルシュ・ナガル (Ādarś Nagar) とハルタラー・コロニー (Harthalā Colony) にある。

アカーリー派は第5代のグル、アルジュン・デーヴァによって編纂されたグルグラント・サーヒブ、そしてグル・ゴヴィンド・スィンハの他には何者の権威も認めない。一方、ナムダーリー派ではグル・グラント・サーヒブとともに、人間としてのグル、グル・ラーム・スィンハたちをも尊んでいる。ナムダーリー派の人々は白いターバンを巻き、アカーリー派は青いターバンを巻いている。

- (1) グルドゥワーラー——ラームガンガー川岸；パーキスターン建国のため避難してきた難民たちがラームガンガー川沿いに居ついた、市の最も古いシャクティ寺院カーリー・マンディルの正面に建てられた救護所内に、彼らによって運営され始めたグルドゥワーラーである。1950年に発足したこのグルドゥワーラーには何の建物もその他の飾りもつくるができなかった。
- (2) グルドゥワーラー・シュリー・スィンハ・サバー——ハイレート・ロード；建物と美しさの点から、このスィクの礼拝所は最も優れている。ここで

は一般の人々のために無料で食事が供される。日の出と共に、順番にシュリー・ジャブ・ジー (Śrī Jap Jī) , スクマニ (Sukhmaṇi) ・シャブド・ハザーラー (Śabd Hazārā) , グル・ゴーヴィンド・スィンハの詠んだジャブ・サーヒブ、そしてチョーパーイー (Caupāī) の詠唱が、美しい声とキールタン (讃歌) の音楽の伴奏でされる。夕刻にはシュリー・ラハラー・サーヒブ (Śrī Rahrā Sāhib) が歌われる。夜にはシュリー・スヘル・サーヒブ (Śrī Suhel Sāhib) のキールタンが歌われる。建立は 1957 年の始めであるが、現在も建築作業が続いている。

(3) グルドゥワラー — アーダルシュ・ナガル (Ādarś Nagar) ; 今からおおよそ 15 年程前に、パーキスターンからの難民たちによって建立された。美しい礼拝所である。

(4) グルドゥワラー — ハルタラー ; 市の発展につれて、シク教徒たちが市中のあらゆる地区に住むようになった。このグルドゥワラーはアーディワースィー (Ādiwāsī = 部族民) ・コロニーに住みついた彼らがおおよそ 15 年前に建てたありふれたグルドゥワラーである。

IX ムラーダーバード市のアーリヤ・サマージ寺院

19 世紀まで、ムラーダーバードはタントラとタントラの行者で有名な町であった。インドを遊行していた一人の修行者、ダヤーナンド・サラスワティーもクンダリー・チャクラ覚醒の噂を聞くと興味を覚えて、ヴィクラマ暦 1912 年、西暦 1856 年にカーシプル、ドロナサーガル、ラームプルを経て、ムラーダーバードにやってきた。ダヤーナンドはこのアゴーリー派のもとで何日か過した。ここからサンバル、ガラムクテーシュワルに行った。ガラムクテーシュワルで、クンダリー・チャクラの秘法を理解できなかった彼は、それまで蒐集したハタ・ヨーガについての書物をすべてガンガー川に投げ込んだ。そして 1912 年 (ヴィクラマ暦) の終わりにファルルカーバードに行った。西暦 1874 年に再びムラーダーバードに来た時、彼は新しい教えを説くようになっていた。今回は彼はラージャー・ジャイクリシュナダース (Rājā Jay Kṛṣṇadās) の屋敷に滞在した。ここにいる時、ラージャーの勧めもあって、1 冊の本を書く話が持ち上がった。後にアーリヤ・サマージにとってバイブルとなったサティヤールタ・プラカーシャがそれである。

(1) 最初のアーリヤ・サマージ・マンディル ; 1879 年 7 月 20 日、上記ラージャーの屋敷内に建てられた。後に、商人のサーフー・ブラジラトナ・コーティーワール (Sāhū Brajretna Koṭhīwāl) がアーリヤ・サマージのためにマンディー・バースに建物を建てた。この建物は現在も 3 階建ての形で残っている。1979 年にここで百年記念祭が盛大に祝われた。宗教会議が開かれ、世界中のアーリヤ・サマージの学者たちが参加して演説をした。ここでは毎週日曜日に早朝と夕刻、供儀等の礼拝が行なわれている。

(2) アーリヤ・サマージ — ガンジ (Gañj) ; 政治家であり、社会活動家であったパンディット・シャンカラダッタ・シャルマー (Paṇḍit Śaṅka-

radatta Śarmā)氏が1914に建立した。女子インター・カレッジも付属している。財産、土地などをみると、これは市内で最も裕福なアーリヤ・サマージ寺院である。

- (3) アーリヤ・サマージ——ハルタラー；このサマージの寺院は市の中央部ハルタラーに、行政の中心であるチャーワニー地区等主要な地区を考慮に入れて独立後1948年に建立された。毎週日曜日の早朝、礼拝が行なわれる。
- (4) アーリヤ・サマージ——シヴィル・ラインズ；ハルタラー地区の寺がかなり遠いために、シヴィル・ラインズ地区のチャーワニーの北東に1979年3月29日に建てられた。ここでも毎日曜日に礼拝が行なわれる。

X ムラーダーバード市のイスラム宗教施設

インドでは現在、イスラムそしてキリスト教の二つの外来宗教が活動している。イスラムは10世紀にインドに持ちこまれた。ムラーダーバードにイスラムがはいったのは1632年頃であるが、現在の地域区分から言うとイスラムの基礎は11世紀にすでにムラーダーバード市の隣のサンバル郡の大部分に築かれていた。

イスラムに将来、生まれるとされた73のセクトのうち、いくつかの有力な派の中心は今日インドにある。中でも重要な二派はデーオバンド(Deoband)派とバレールヴィー(Barelvi) (119)派である。バレールヴィー派の中心はムラーダーバードにあり、デーオバンド派の中心はサハランプル(Saharan Pur)県のデーオバンドという場所で活動しているデーオバンド・マダルサー(Madarsā) (120)である。バレールヴィー派の教育の中心施設はムラーダーバードにあるイスラム大学ジャーミヤ・ナーミヤ(Jāmiyā Nāmiyā)である。スンナ派のバレールヴィー派の勢力が増大するのを見てデーオバンド派は世界中のイスラム教国から自派の協力者を招いて、ムラーダーバード市に新しい町イスラーム・ガーハを作って、三日間の日程で世界大会を開催した。この大会は1978年7月30日から8月2日まで開かれ、世界中からのおよそ40万人の参加者を前に500人が立って演説をした。この歴史的な大会においては、バレールヴィー派に対する反対の他に、物質的な迷妄を捨てて神に托された仕事に没頭するようにとの教えがあった。同時にデーオバンド派の大学をもう一つムラーダーバードに開校する決議がなされた。これらのデーオバンド派をワハービー派(Wahābī) (121)の人々すべてが支持している。これはデーオバンド派によってインドで開催された二度目の大会であった。第一回はグジャラート州のゴダラー(Godharā)という土地で78年の3月に開かれた。

イスラムは無形の唯一神を信仰する一神教である。一日に五度の礼拝(ナマズ)が決められている。ムハンマドの告げた神聖な書クラーンを信じることが、ムハンマドの信徒、一般の信徒ムスリムにとって必須のこ

とである。ムハンマドの後、4人のイマーム (Imām) (122) がそれぞれの信仰に従ってムスリムを導いた。これらのイマームの教えによってムスリムは四派に分類することができる。ハナフィー派 (Hanafī) , マーリク派 (Mālikī) , シャーフィイー派 (Šāfiī) , そしてハンバル派 (Hanbal) である。この他にもう一派あり、アハレー・ハディース (Aḥal-e Ḥadīḡ = ハディースの徒) (124) と呼ばれている。ハディースの徒にとってはイマームに対して特別な敬意や信仰は必要ではない。普通、彼らはイマームに何ら信頼を抱いてはいない。ただ礼拝の仕方には何の違もない。そもそも、ムスリムは大きく二つの派に分かれている。シーア派 (Šī'a) (125) とスンナ派 (Sunna) (126) である。ムラーダーバードにはシーア派の数は少なく、スンナ派の人々の方が多い。イマームに敬意を払わないハディースの徒も当市にはかなり住んでいる。神とコーランについては同じ信仰を持っていながら、予言者の地位とハディースについての違いからムスリム間にはかなり広範な考え方の違いがある。この相違のために、当市には四つの異なる考え方の人々が住んでいる。ワハービー , カーダヤーニー (Qādayānī) (127) , バレールヴィーそしてデーオバンディーである。イスラムに78派が生ずるとの考えは良く知られており、すべての派はムハンマドに連なるものではあるが、彼らのハディースは少しづつ異なっている。コーランについては完全に一致しているが。ムラーダーバード市にはバレールヴィー派の人が多い。彼らの高等教育機関ジャーミヤ・ナーミヤは当市の誇りである。宗教的には彼らは特に堅固な信仰を抱いている。

デーオバンド派は必要と状況に応じて変化することに長け、礼拝を人に見せるものではないと考えている。この人たちはウルス (Urs) (128) のような行事を信じていない。

当市にはカーダヤーニー派の人たちもいるが、デーオバンド派に比べると少ない。彼らによれば、預言者ムハンマドの後にも、別の預言者が生まれることができ、それがグラーム・ムハンマド・カーダヤーニーであるという。彼らはその使徒をマシーハ・エ・マウード (Masīh-e Ma'ūd) 即ち帰ってきた救世主と呼んでいる。アザーン (Azān) (129) の際、彼らはムハンマドの名前の次にハザラト・グラーム・ムハンマドの名前を付け足して礼拝する。

当市の四つ目の派はワハービー派である。ワハーブは神の名である。スンナ派のバレールヴィー派の人々は一日に五度の礼拝の他にマザール (Mazār) (130) で願掛けをしたり、ウルスを祝ったりする。しかし、ワハービー派の人々は宗教論争が起こるとデーオバンド派につく。彼らは少数派である。ワハービーのイマームのもとでは、普通バレールヴィー派はナマーズに加わらないが、バレールヴィー派のイマームのもとでは、ワハービー派は礼拝に参加すると言われている。

(1) イード・ガーハ (Īd Gāh) (131) ; ムラーダーバード市内に1857年以前にイード・ガーハのような場所のあった記録はない。シャハル・イマーム (Šahar Imām) のカマール・ファーヒム (Kamāl Fāhim) 博士によれば、

この場所がイードガーハに選ばれたのは、57年の独立戦争以後のことであるという。このイードガーハの礼拝の中心となる場所には広い庭があり、そこで毎年およそ七万人もの信者がイードの祭りの際礼拝に加わる。旧式小型レンガ造りであるが、増築の時には新しい型のレンガが使われている。

イードガーハの後ろには、原形のまま保存された考古学と建築の生きた実例が残っている。そこで人々はイスラムの宣教と修行のために、チッラー (Cillā) ⁽¹³²⁾を行なって超人的能力を身に付けたのである。このチッラーは4ヶ月、6年もしくは12年間に亘って一人きりで行なわれた。その建築様式はインド風であり、屋根から突きでている樋に豚の顔の形をした管がついている。イスラムではどのような動物の顔の像も宗教施設に描くことは禁止されている。これは何か特別な種類の土で作られている。

イードガーハとその後ろのチッラーのための建物には貝を粉末にした材料が使われている。この材料はインドでは14世紀頃までの建築に特によく用いられたものである。ムガル時代にはこの代わりに石灰が用いられた。

イードガーハの裏の少し離れた所にダルガーハ (DarGāh) ⁽¹³³⁾が一つある。これはシャーハ・ムカッマル・サーハブ (Sāh Mukammal Sāhab) の廟である。この人物はアラブとイランの間のサハダールワースト (Sahdār-wāst) という土地の人と言われている。彼の死後、現在まで6代の家系が伝わっている。従ってこのズィヤーラトはおよそ150年から200年前のものと言える。彼については、自分の乳を自分で飲んでしまう山羊を一頭飼っていたことで有名である。彼のウルスはラジャブ月 (Rajab) ⁽¹³⁴⁾の5、6、7日に祝われる。彼から数えて6代目のリジワーン・アリーは現在およそ65歳である。

イードガーハの外の大通りにもう一つ小さなマスジドがある。これはエーク・ラート・キー・マスジド (Ek Rāt kī = 一晚の) と呼ばれている。46年か、48年のインド分離独立の時、パンジャブそしてパーキスターンからの避難民がここに集められた。その頃イードガーハの周囲にはムスリム居住区はなかった。近くの土地はあるヒンドゥーの地主が所有していた。人家もなかった。しかし、イードガーハの近くにヒンドゥーが住みつくのを見て、ムスリムたちはヒンドゥーの土地に宗派的熱情に動かされて一晚でこの小さなマスジドを建設した。この時、市内に大規模な宗教暴動が起こった。

(2) ジャーマー・マスジド (Jāmā Masjid) ⁽¹³⁵⁾; これは昔は別の名前であった。石碑によれば、これが異教徒ヒンドゥーの土地に最初に建てられた当市最古のマスジドであることは明白である。このマスジドはタージ・マハルを築造したムガル皇帝シャーハ・ジャハーン (Sāh Jahān) ⁽¹³⁶⁾への敬意をこめて、サンバルのスーパーダール (Sūbedār) ⁽¹³⁷⁾がカトハルの地を占領した際に建てたものである。カーフィル (= 異教徒) であるヒンドゥーの聖地にこの改変もしくは干渉がなされたのは、この地にヒンドゥー以外の誰も足を踏み入れ得なかった時のことだった。建立されたのは1632年だと言われている。

始めはわずかに三門のマスジドであったが、その後増築されて今は門 (Dar) が七つある。これはラームガンガー川の南岸のカトハルのキラ (Qilā) とカトハルの居住区の間にある。

ジャーマー・マスジドのイマーム⁽¹³⁸⁾アッワル・サイヤド・モーラーナー・アーリム・アリー (Awwal Sayyid Maulānā 'Ālim 'Alī) は1857年の独立戦争のおよそ20年前にデリーからムラーダーバードに来た。反乱後、宗教を隠れ蓑に政治的統一を得るために、この三門の小さなルスタムカーニー (Rustamkhānī) ・マスジドをジャーマー・マスジドとした。

ここでは、毎週金曜日に集団礼拝が行なわれる。元来ここはカタ派 (Kaṭha Sakha) のバラモンたち⁽¹³⁹⁾の聖地であった。ラームガンガー川沿いの大変美しい場所である。カマール・ファーヒム博士によれば、ジャーマー・マスジドの収入は所有の店舗などから毎月およそ1500ルピー程だそうである。

(3) ルスタムカーニー・マスジド；市内にはこの名前の場所が2ヶ所あった。一つはジャーマー・マスジドになった。もう一つは、近代的なピールガイブ (Pīrgaib) 地区のまったくのヒンドゥー居住区のみんちにある。これは一風変わったマスジドである。大変に小さく、インド風建築様式の建物で、四方をヒンドゥー彫刻をほどこした外壁で囲まれている。頑丈なマスジドである。市がムガル帝国の支配下にあった頃、サンバルのスーパーダールにして皇帝の将軍ルスタムカーン・ダキニー (Rustamkhān Dakhinī) がここでまず最初に祈りを捧げたと言われている。建立、もしくは改築の時期を刻んだ石碑はない。しかし、このマスジドにはラヴィ・マンディル (Ravi Mandir) と非常に近い時期の彫刻が残されている。様式から見て、これはラージプート時代の建物であろう。

(4) シャーヒー・マスジド (Shāhī Masjid) ；このマスジドについての古い記録はない。しかし、名前から人々はバードシャーハ (Bādsāh)⁽¹⁴⁰⁾時代のものであると考へて、普通バードシャーヒー・マスジドと呼んでいる。ムラーダーバードにおけるバードシャーハ時代は18世紀の始めには終わっていた。それが最後であった。ムラーダーバードはローヒルカンド (Rohilkhand) の行政区に含まれていた。また、アワドの太守の治政下にあった。そのためこのマスジドは少なくとも250年程昔のものであろう。

このシャーヒー・マスジドには石碑があり、それによると1878年の建立である。⁽¹⁴¹⁾デーオバンド派の人々により、ここにマダルサー・ウル・グルバー・カースィム・ウル・ウルーム (Madarsā-ul Gurbā Qāsim-ul 'Ulūm) という名の孤児院が開設された。ムラーダーバード県の中心地である当市において、新思想と結びついた活動の中心となった。

マスジドは大きく、市のちようどまんちのシャーヒー・バーザール (Shāhī Bāzār) にある。この頃はこの市場をバルタン・バーザール (Bartan Bāzār) と呼んでいる。ラージプート時代の古い町、ローハールガル (Lohārgal) 地区、そしてマンディー・バースはこのバーザールと接している。建築の点からは何ら特筆するところはない。

- (5) キレー・ワーリー・マスジド (Kile Wālī Masjid) ; 言い伝えによるとルスタムカーンが当市を占領した後、ここがマスジドにされたのだそうである。しかし、調べたところによると、王立の学問所の土地のことをキラー (Kilā, Qilā) というのだが、このキラーは誰かムフティー・アッミー (Muftī Ammī) という名の人物の土地であった。1864年から65年に、サイヤッド・アフマド・カーン (Sayyid Ahmad Khān) (142) が当市にサダル・アーラー (Sadar A'lā = 高級判事) としてやってきた時、彼の尽力によりムフティー・アッミーの未亡人のビルキース・ジャハーン (Bilqīs Jahān) がある大学のために土地を全て寄贈 (ワクフ) したのらしい。おそらくこのマスジドはそのアッミー家のものであったのだろう。現在もこのマスジドはワクフの委員会が管理している。委員会の責任者のアナワールル・ハク・ニヤージー氏によると、マスジドの収入は月額200ルピーとのことである。建物は古く、美しい。近くにダルガーハがあり、三人の墓がある。最も古いのは1850年頃アフガンからやってきた学者のグル・ムハンマド (Gul Muḥammad) という人物のものである。このマスジドには人々が来て泊るための部屋フジュラー (Hujrā) ⁽¹⁴³⁾ も付属している。
- (6) マスジド・ジャーミヤール・ナイーム・ウッディーン ; バレールヴィー派のスナ派信徒のモーラヴィー・ナイーム・ウッディーン (Maulavī Naīm Uddīn) が1909年、イスラムの信仰のために小さなマスジド、シーシュマハル (Sīś Mahal) に学校を開いた。大学レベルの宗教教育のために活動中である。このマスジドの境内は現在、相当に広がった。建築は平凡ながら、ルヘールカンドの中心、バレリーから生まれた思想の中心地としてムラーダーバードが誇りとするところである。この学校では次の九科目が教えられている。コーラン、ハディース、キラート (Qirat コーランの正しい朗唱) ファルサファー (Falsafā, 哲学) , ハイヤート (Haiyat, 天文学) , アダブ (Adab, 文学) , ティブ (Tib, 医学) , マンタク (Manṭaq, 論理学) そしてシャーリーア (Šārī'a, イスラム法学) である。
- (7) マスジド・アリー・フサイン・シャーハ (Masjid 'Alī Husain Šāh) ; ラームガンガー川の南岸の、ジャーマール・マスジドから半キロメートル東へ行ったところの、市の古い農村地区デーハリー・バグ (Deharī Bag) にある。カトガル駅の東である。境内には三つの廟がある。一つはアリー・フサイン・シャーハの父で、ヒジュラ 暦1216年に亡くなったファキール・シャーハ (Faqīr Šāh) のものである。ハーフィズ・アリー・フサイン・シャーハは同じく1297年に亡くなった。1979年のイード月の11, 12, 13日に彼の102年目のウルスが祝われた。この様に彼の父親の墓所に、今からおよそ180年前にこのマスジドは建立されたと思われる。

収入が多く、裕福なマスジドである。マスジドの土地で商売をしている店の家賃が入る。ウルスの時にはおよそ4000ルピー程の支出が毎年ある。ウルスは三日間である。ウルスに来た参拝者のための集会場もある。毎週、100ルピー程の賽銭、お供えの布、掛布などが年間におよそ8000ルピー

一程になる。

ハーフィズはラームブルのルヘラー族の出身で、彼らの一族はムラーダーバードのディーワーン・カー・バーザール (Dīwān kā Bāzār) に昔からの屋敷に住んでいる。ルヘラーの太守ドゥーンデー・カーン (Dhūḍhe Khān) の6代目の子孫であった。ドゥーンデー・カーンはムラーダーバードそしてビソーリー (Bisaulī) の支配者であった。

アリー・フサイン・シャーハはラームブルで亡くなった。彼の遺体をムラーダーバードに運ぶために、ラームガンガー川を舟で渡ろうとしたところ、舟頭たちが断わった。構わず遺体を舟に横たえようと、船は自然に現在墓地のある所に着いた。そこに彼の廟が作られた。

- (8) マスジド・ショーカト・アリー (Masjid Šaukat ‘Alī); 植民地時代、カーズィー (Qāzī) ショーカト・アリーは亡くなるまでヒンドゥーとムスリムの融和のために努力をした唯一のムスリムであった。彼の一族の人々は今日もヒンドゥーの祭りにヒンドゥーに混って参加している。連合州の政治団体主催でバーバー・バグワーン・ダース (Bābā Bhagwān Dās) の指導のもとに1920年10月9日から11日までムラーダーバードで政治集会が開かれた時、ガンディー・ジーそしてネルーのような家柄の人々も彼の広い屋敷に泊まらざるを得なかった。インド中からやってきた藩王、領主たちも皆そこに滞在した。サル・サイヤッド、マダン・モーハン・マラーヴィヤー (Madan Mohan Mālavīya), ジャイヌル・アーヴェーディーン (Jainul Āvedīn) 他の人々もそうしたものだ。カーズィーはアラブ出身の一族の出であった。1870年頃に広い敷地 (Bag) に自分の屋敷とともに来客に応接するための広間 (Dīwān Khānā) とマスジドを建てた。この広間にはインドの多くの偉人の肖像画が今も掛っている。

ショーカト・バーグは古い場所である。反乱の時の犠牲者の墓がいくつかある。その内の二つは特に触れておく価値がある。一つはサル・サイヤッド・カーンの妻の墓、もう一つはジャイヌル・アーヴェーディーンの子の墓である。この庭園を広げ、かつ安全のために1903年に門を建てて周囲を限った。このショーカト・バーグの大きな庭園には北側に小さな門が一つあった。現在も門は北に向かって作られている。1857年以前の建物が一つあり、その塔の彫刻は非常に繊細で美しい。

ムラーダーバードはウルドゥー語のガザル詩の名手、ジガル (Jigar) (144) の名とも結びつきが深い。このショーカト・バーグもわが国の偉大な指導者ばかりではなく、ジガル・ムラーダーバーディーを憶させる思い出が多く残っている。詩人がムラーダーバードを捨ててゴーンダー (Gonda) に行かねばならなくなった時、彼はこの門を歩いて庭園から外へ出てこの有名なガザルを詠んだ。——重立つ酒場の客の一人に私を数えて、いつまでも思い出しては泣いてくれるだろう、盃よ。

- (9) マスジド・アハレー・ハディース; アハレー・ハディースもイスラムの一派である。当市のこの派のマスジドはマンディー・バース地区にある。このマスジドは二階建である。現在は二階部分だけが礼拝に使われている。

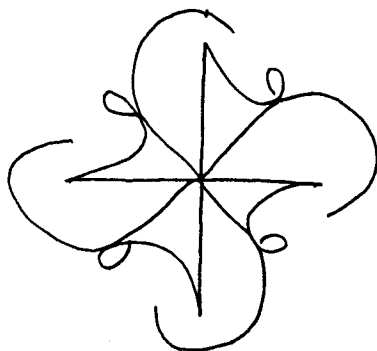
1328年(ヒジュラ暦)の建立である。マスジド内に、イマームが礼拝するためのミフラブ(Mihrāb)⁽¹⁴⁵⁾がない。しかし、イマームは五つある門(Dar)の中央の門に立って礼拝する。一階にミフラブの印が刻まれている。フトバ(Khuṭba)⁽¹⁴⁶⁾のための場所は二階にある。この派の人々はイマームを一人も承認していない。

(10) マスジド・バーラー(Masjid Bārā);これは市内の稠密なムスリム居住区であるアサーラト・プラー(Asālat Purā)にある。建立はヒジュラ暦1332年である。普通はエーク・ミーナール・ワーリー・マスジド(Ek Mīnār Wālī Masjid=塔が一基のマスジド)とか、クライシュ・マスジド(Qurais Masjid)と呼ばれている。当市ではクライシュというのは屠殺業者のことである。

このマスジドには、マーン・カリーファー(Man Khalīfā)という名の彫刻家が彫った扉が四つある。その内の三つまでは、非常に美しい彫刻が施されているが、四つ目の扉は、誰か腕に覚えのある者は同じく彫ってみよというわけで、無地のままに残されている。彼は世界中の芸術家に挑戦したわけである。ムラーダーバードの資産家で信仰心の篤いムスリムが遠方から彫刻家を呼び寄せたけれども、誰も敢えて引き受けようとする者はいなかった。マスジドは大きく、美しさの点からも無比である。

(11) スンハリ・マスジド(Sunharī Masjid =金のマスジド);アワードの太守が1858年に建立したマスジドである。太守は晩年によくムラーダーバードに来た。彼はこのマスジドを庇護したと言われている。しかし、それを示す記録は残っていない。昔は金の装飾が施されていたと言われているが、現在ではその痕跡は見られない。

(12) モーティー・マスジド(Motī Masjid =真珠のマスジド);これはサンバリー・ダルワザー(Sambhalī Darwāzā)の近くにある。建立時期は不明である。もっとも、モーティー・マスジドという名前は、このマスジドがムガル時代のものであることを示している。しかし、建立者の名はムハンマド・フサイン・シャーハ(Muhammad Husain 'Sāh)で19世紀の独立戦争前に建てられたと言われている。反乱時、イギリス人はこのマスジドを破壊した。現在、マスジドには木の外壁にムハンマドという名を花の形にあしらった図案がわずかに二つ残っているだけである。この図案はどこから読んでもムハンマドと読めるようになっている。



- (1 3) パッキー・サライー・キー・マスジド (Pakkī Sarāy kī Masjid);
 これは大きいマスジドで、昔駱駝の車で旅をした人たちが夜休息のためにここに立ち寄ったものであった。およそ百年前に建てられたものである。小さな池に色とりどりの魚が飼われている。このマスジドはガラーシャヒード (Galāśahīd) にある四つの門のついた大きな建物であるが、現在は不法に孤児たちが住みついている。また、マスジドの保護を受けて住んでいる人たちもいる。ムスリムの多い居住区にある。駱駝に車を挽かせる御車たちのためのマスジドがもう一つマチュアー (Machuā) ・プラー地区にもある。
- (1 4) ハリー・チュゴーン・キー・マスジド (Harī Cugō kī Masjid); 昔、ここに広い牧場があったので、この地域はハリー・チュゴーン (青草を食むものという程の意味) と言われ、やがて人が住むようになると、地区も同じ名で呼ばれるようになった。昔はここは羊・山羊を飼う人々が住んでいた。彼らの子孫は今も住んでいてパーサー (Pāsī) と呼ばれている。この地区にはもう一つの同様の集団が住んでいて、自らムラーオ (Murāo) と称している。彼らはチャンドラ・グプタ・マウリヤ (Candra Gupta Maurya)⁽¹⁴⁷⁾ の子孫と自称している。この人たちは羊・山羊を飼う他に、森で狩りもする。猪を狩るのが得意で毎年、集団で狩りに今も出かけて行く。彼らは今もヒンドゥーでハリー・チュゴーンのマスジドの近くのサンバリー・ゲートまたプラー地区の間に住んでいる。18世紀の終わりに、ムスリムの住民の数がこの地域で増えた時、彼らはここに小さい礼拝所を一つと屠殺場を一つ建てた。およそ15年程前に屠殺場はなくなったが、礼拝所は大きくなってマスジドになった。
- (1 5) ジャップー・ケー・ナーレー・キー・マスジド (Jhabbū ke Nāle kī Masjid); 当市には次の三つのカースト集団が昔から住んでいる。ムラーオ、ババリヤー (Babariyā) 、そしてバルバル (Barbāl) である。この三つの内のどれか一つの集団の誰か勇敢な人物が、チャーワニー地区に大きい牧場と畑を作った。彼の本当の名前はジャッバー (Jhabbā) であったが、通称ジャップーとなった。彼は自分のカースト集団の住地とラームガンガー川を一本の大きい運河で結んで、自分の領地の様に境界を定めた。ムスリム時代にムラーダーバードが支配された時、彼の一族は彼の遺志を継ぐことができず、わずかにジャップーという名前が残るのみとなった。運河は広々としたところがあり、大きい。この運河の岸沿いのジャップー地区にこのマスジドはある。およそ150年程前のものと言われている。
- (1 6) ラッジャル・ワリー・マスジド (Rajjhar Wālī Masjid); 先に述べたカーニーパー地区はスィッダ派の信徒が分裂したために、三つの地区に分かれた。中心地はカーニーパー・キー・ガティヤーと呼ばれ、スィッダたちの道場の部分はガリー (Garhī) と言われている。そして、この場所にジャールヴィール (Jharvīr) という名のサントの古い廟がある。毎年、ラクシャバンダンの祭りの頃に、ここでスィッダの集会 (Chariyā) が開かれる。三番目の場所はこの両者の中間にあり、ラッジャルという名のサントの名前がついている。これら三者とも現在のナワープ・プラー・プー

ルビー (Nawāb Purā Pūrbī) 地区のラームガンガー川沿いにある。このスイッダゆかりの土地に昔から住んでいるのは、マッラーハ (Mallāh = 漁師)、クムハール、カハール、ゴースィー (Ghosī)⁽¹⁴⁸⁾、そしてディーマル (Dhīmar)⁽¹⁴⁹⁾ たちである。ゴースィーたちはムスリムである。そこで、彼らの居住区をゴースィヨーン・キー・アーバーディー (Ābādī)、そしてラッジャル・ワーリー・マシジドをゴースィヨーン・キー・マシジドとも言う。ラッジャルの公園 (Bāg) に彼らが住みついたために、マシジドをラッジャルのマシジドと言うようになった。およそ 125 年前の建立である。ラッジャルはたぶんニルゲン派のサントであったのだろう。

(17) バーバリー・ワーリー・マシジド (Bābarī Wālī Masjid) —— カルバラ (Karbalā) の近く ; 当市のイードガーハの近くに市の境界を流れているカルラー (Karūlā) という川のこちら岸にラージプート時代の井戸が一つある。この井戸には水面にまで降りるための階段が造られている。こうした井戸のことをバーバリーと言う。独立後、ムスリムたちがこの井戸のところをマシジドを建てた。彼らはこれより 100 ガズ (約 91 m) 程先に、毎年モハッラム (Moharram)⁽¹⁵⁰⁾ の祭りのためにやってくる。カルラーという語はカルバラ (Karbalā') に似ている。そこで彼らはここをカルバラと呼び慣わしている。ここに小さな墓地もある。

(18) ジャーラト・シャーハ・ブラーキー・サーハブ (Zyārat Śāh Bulākī Sāhab) ; ムラーダーバード市ではパラヴ (Parāv) のマシジド⁽¹⁵¹⁾ 以上に多いのがタキヤー (Takiyā) のマシジドと云われているものである。つまりタキヤー即ち墓地の付属しているマシジドである。ダルガーハ、ジャーラトもタキヤーのマシジドである。モーティー・バーグ (Motī Bāg) のドゥーンデー・カーン・ナワブのマシジド、そしてラール・バーグの既のある大きいマシジドも同様である。この二つのマシジドは装飾と建築の点から古いものであろう。

さて、これは当市で最も古いダルガーハである。スンナ派ワクフ・ボード・ラクノー (Sunnī Saṅgathan Waqf Board Lakhnau) の監督のもとに市内のワクフ委員会が管理している。このダルガーハはエークチャクラ (Ekcakra)、アルガワンプル (Argawānpur) のチャッカール・カー・マイダーン (Cakkar kā Maidān) という名の地区にある。ラームガンガー川岸の広い地区である。昔からの言い伝えでよく知られている二人のサント、シュリー・ミシュリー・ギリ・ジーとハザラト・シャーハ・ブラーキー・サーハブとは、今日もヒンドゥー・ムスリム融和が話題になる時にはその名が思い起こされる。シャーハ・サーハブは 250 年程前に当市で亡くなった。彼の三人の妻には九人の子供があった。子供たちはみな神童と言われた。シャーハ・サーハブの廟には彼の上の三人の息子の墓がある。彼のもう一人の息子の墓は本県のタークルドゥワラー (Thākur Dwārā) という所の、シャーハ・サーハブの師の廟の近くに、カイヤーン・ワーリー・ミラク (Kaiyā Wālī Milak) 地区にある。さらに別の息子と妻の一人の墓はムラーダーバードの北の境にあるビジュノール (Bijnor) 県のシヴァ

ハラー (*Sivaharā*) という土地にある。もう一人の妻と三人の娘の墓は当市のダルガーハの近くの墓地にある。一人の息子の墓はイギリス統治時代の流刑地アンダマン島のニコバールのどこかにある。三人目の妻については何もわからない。

市内の数あるダルガーハやジャーラトの中で収支がはっきりしているのはこのダルガーハだけである。毎年イスラム暦2月、サファル (*Safar*) 月の25日から28日までの4日間、このダルガーハで盛大なウルスが祝われる。1979年は252年目のウルスであった。この四日間、ダルガーハの境内で市が立ち、その席料がおおよそ10,000ルピーである。毎週25ルピー、従って年間1,500ルピー程がお賽銭やお供えの形ではいる。この他にバターサー (*Batāsā* = 砂糖菓子的一种) や掛布といった供物が別にある。ダルガーハ内の部屋の家賃が毎年約1,000ルピー。これらの収入はダルガーハのムタワッリー (*Mutawallī*)⁽¹⁵²⁾ であるイシュティヤーク・フサイン (*Istiyāq Husain*) 氏によって管理上の必要に応じて支出される。供物の掛布やその他はダルガーハに参詣に来る信者たちに配られる。遠方から願掛けにきて、授けた子供たちの長寿を祈って人々はこれらの掛布を子供に着せる。このダルガーハ内にはブラーキー・サーハブの時代の古い Masjid があって時々建増されている。

- (19) ダルガーハ・ハーフィズ・マジャルッラー・シャーハ・シャフィー・チシュティー・ニザーミー (*Dargāh Hāfiz Majarullā Śāh Śafī Cīstī Nizāmī*) ; このジャーラトはおおよそ42年前、ヒジュラ暦1358年に建てられた。ハーフィズはイラーハーバードの人であった。アッフル・ジャマディー月 (*Avval Jamādī* = イスラム暦5月) のウスマーニー (*Usmānī*) に毎年、イラーハーバード、バーガルプル、ムルターン、そしてパーキスターンのカラチでウルスが祝われる。彼の信者はパンジャープの人たちが多い。彼らは魚、牛、水牛の肉そして大蒜をハーフィズが禁じられたとして食べない。鹿、山羊、鶏等の肉は食べてもよい。ハーフィズは第一次世界大戦の時、バルーチーの部隊で軍曹であった。パターン人であった。
- (20) ジャーラト・シャーハ・サファー・ミヤーン (*Zyārat Śāh Safā Miyān*) ; この廟 (*Bārā*) はシャーハ・サファー地区にある。彼はデカンのハイダラーバードの人と言われている。イギリス統治時代に政府の仕事でムラーダーバードに来た。当地のサントたちの影響を受けて行者となった。75歳で歿したらしい。
- (21) ニーム・ワリー・ジャーラト (*Nim Walī Zyārat*) ; プリス・ラインズのバングラー・ガーンオ地区の近く、チャーワニー地区にあるハザラト・アーリム・シャーハ (*Hazarat Ālim Śāh*) のこの廟は一本のニームの木 (インド栴檀の木) の下にあるため上記の名で呼ばれている。彼はハザラト・ブラーキー・シャーハの母親の一族出身と言われている。彼は高名な行者であった。毎週木曜日に人々はお供えをしにやって来る。
- (22) ジャーラー・ワレー・サイヤド・ミヤーン・キー・ジャーラト (*Jhārī Wāle Sayyid Miyān kī Zyārat*) ; 1945年に鉄道省の役

人として赴任してきたチョーデー・ミヤーン・カーダリー (Chote Miyān Qadarī) は 3 年後、ある尊い行者の墓が茨の藪 (Jhaṛī) に覆われているという夢のお告げを受けた。ただちに、カーダリー氏は藪を切り払い、サイヤド・ミヤーンの廟を建てた。氏によれば、このジャーラトはとても古いものだそうである。彼は自ら最初のムタワッリーにもなった。鉄道の仕事の傍ら、毎週木曜日に氏はここに来て、願掛けにお参りに来る人々に結んだ青い紐とジャーラトの土の包を授けている。人々はバターサー、お金、そして掛布等を供える。筆者がこのジャーラトで見かけたのは若い娘や婦人ばかりであった。男性は見かけなかった。おそらくあまり来ないのであろう。カーダリー氏によれば、サイヤド・ミヤーンは三人兄弟であった。他の二人の墓は市内のカンパニー・バーク (Company Bāg) 地区にあり、そのムタワッリーも氏がつとめている。

(23) アジャマト・ウッラー・カーン・キー・ジャーラト (Ajamat Ullā Khān kī Zyārat) ; この人物はイスラム統治の最後のころのムラーダーバードの総督であった。彼を記念して地区全体をバーラハダリー (Bārah Darī)⁽¹⁵³⁾ と呼んでいる。このジャーラトは古く、天井のないバーラハダリーに墓がある。しかし、信頼できる記録は残っていない。

XI ムラーダーバード市のキリスト教会

1802年、借金のかたにイギリスがアワード王国の支配権を奪った時から、ムラーダーバードにキリスト教が正式に普及し始めた。ムラーダーバードは当時、デリーのムガル帝国領と端を接し、アワードの太守領であったルヘールカンドにあった。続いてデリーの支配権がイギリスに移ると、当市のチャーワニー (駐屯地) はさらに大規模なものになった。1857年の反乱時には、当市においても激しい戦闘があった。1861年に現在のプリズ・ラインズとシヴィル・ラインズ地区にキリスト教徒たちの非常に広い居住区が発展した。イギリス統治時代の当市は、キリスト教徒の居住区の四方を警察と軍隊が囲んでいるような格好であった。インド人居住区とイギリス人居住区の間には、カンパニー・ガーデンがあって、イギリス人たちが家族連れで散歩をしたりしていた。インド人は公園の外に立って、白人の高官の子供のお守りをしたり、彼らに雇われたりしている自分の縁者たちを見物するためにやってきたものだった。こうした折りに、インド人とイギリス人官吏の家族同志が会うようなこともあった。カンパニー・ガーデンと市街地の間に刑務所と売春宿があった。チャーワニーには外国人専用の酒保があり、品物が安く買えた。

1857年の反乱の際に、祖国に背いてイギリス人に協力した人々はラーイバハードゥル (Rāy Bahādur) とかラージャーといった称号をイギリス人から授けられた。ムラーダーバードの住民たちが利己心故に、愛国心をどれ程失なってしまっていたかは、当時サーの称号を持っていたインド人が同時に、五人もいたことで良くわかるだろう。連合州の知事であったサー・モーラヴィー・ムハンマド・ヤークブ (Sir Maulavī Muḥammad Yāqub)、

そしてイギリス総督参事会 (British Governors Council) の最初のインド人参事会員、サー・ジャガディーシュ・プラサード (Sir Jagadīś Prasād) もムラーダーバードの人であった。サーの称号を得た残りの三人は、サー・ラザー・アリー (Sir Razā 'Alī)、サー・シャフアアト、アフマド (Sir Šafā'at Aḥmad)、そしてサー・マハムード・アリー (Sir Maḥmūd 'Alī) である。57年の反乱ではメーラト、ムラーダーバードの人々が指導的立場にあった一方で、ラージャー、サー、ラーイバハードゥルといった称号を得たイギリス統治の支持者、祖国に対する裏切り者の数もまた少なくはなかったということがわかる。こうして、イギリスの支配下、自分の勢力を伸ばそうとの意図からキリスト教徒の数が増えていった。彼らはイギリスの保護を受けつつ教会を建立した。

当市のキリスト教会はローマ・カトリック教会とプロテスタント教会の二つに大別することができる。1904～05年のセンサスには調査をした L. F. バークレー (Barkley) 自身がクリスチャンでありながら、キリスト教会に関する何の記録もないのはまことに不思議としか言いようがない。もしかすると彼はローマ・カトリック信者であったのかもしれない。というのは当時ムラーダーバードにはカトリック教会は一つもなかったからである。

①ローマ・カトリック教会

(1) 聖アントニー教会 (Saint Anthony Church)

これはローマ・カトリックの唯一の教会で、シヴィル・ラインズのマノーランジャン・サダン (Manoranjan Sadan) の近くにある。この教会の基礎は1911年、デリー・ダルバール (Dillī Darbār)⁽¹⁵⁴⁾ の時に築かれたと言われている。現在の神父はこれに関して何も知らないと言う。訊ねてみると、およそ75年程前に建てられたものではないかとの返事である。神父はこの教会に赴任してきたばかりである。神父によると教会には何の由来も刻まれていないとのことである。教会は平凡な建物であるが、正面の庭に聖母マリヤの美しい石像がある。

②プロテスタント教会

(1) 聖ポール教会 (Saint Paul Church) ; プリス・ラインズにある。建立について記した石碑はない。当市の最も古い教会である。牧師 (Pādārī) によるとおよそ1840年頃に建てられ、1857年からこの教会についての記述が公文書に見えるという。これは北インド教会 (Church of North India) によって管理されている。

③メソジスト教会 (Methodist Church)

市にメソジスト教会がなかった頃はメソジスト大学内の付属教会堂が礼拝のために用いられていた。後に三つのメソジスト教会が順次建てられた。

(1) セントラル・メソジスト教会 (Central Methodist Church) ; これは古い建物である。1885年にサー・ジョン・クレークラフト・ウィルソン (Sir John Krekrāft ? Wilson) C. B.⁽¹⁵⁵⁾、K. C. S. I.⁽¹⁵⁶⁾ 県行政長官 (Magistrate)、徴税官判事を記念して、この教会が建てられた。これはタウン・ホールの近くにある。現在はおおよそ20年程から、この教

会では礼拝はまったく行なわれていない。人々はこの教会をガンター・ガル (Ghanṭā Ghar = 鐘楼) と呼んでいる。4階建である。四階の塔は77年に崩壊した。25年前から4個の鐘も取りはずされたままになっている。

(2) ダーング・メソジスト教会 (Dāg Methodist Church) ; これは裁判所の近くのダーング居住区にある。大部分がヒンドゥー不可触民からの改宗者が日曜日の礼拝にやって来る。この教会は独立運動が盛んな頃の1942年にキリスト教徒が安全に礼拝できるようにするために建てられた。

(3) フィリップ・メモリアル・メソジスト教会 (Philip Memorial Methodist Church) ; これは市の最大の教会で1966~7年に建てられた。建築の点からみて、現代のそして現世代のもっとも美しい建物である。この教会はミッション・ガールズ・カレッジ (Mission Girls' College) の敷地に続いている。当市の改宗キリスト教徒の大部分はヒンドゥーの元シェードラの人々であり、その内の大部分がメソジスト派に属している。従ってダーング・メソジスト教会の礼拝者は下位カーストからの改宗者が多く、その他のキリスト教徒に比べて、その生活水準は相当に低い。そのため生活水準の高い人々のためにこの教会が建てられた。

③ セヴンス・デイズ・アドヴェンティスト教会 (Seventh Days Adventist Church) ; 市の最も新しいキリスト教の一派である。まず1965年にこの派の大学が開校され、後に小さな教会になった。1975年に増築された。

④ ペンテコスタル教会 (Pentecostal Church) ; 1950年の建立である。この派 (ペンテコスタル派では父、子、精霊の三位一体が礼拝の対象となっている — 原註) の基礎が築かれたについては一つの神秘的な言い伝えがある。ヨハン・カーネリウス、そしてT.V.リッダルに夢でお告げがあった。即ち靈感を感じた。そこで彼らはずき動かされた。カンジャリー・サライー地区の一軒の借家にこの派の礼拝所を開いた。今日もその礼拝所はそのまま続いている。現在、管理しているのは退職した子供のいない女性教師である。後継者は誰もいないので、この派の将来は明るいとは言えない。キリスト教の慣習に従ってマザーと呼ばれている彼女は、先のことを案じており、自分が老齢にあることを考えて同じ派の他の教会と手紙をやりとりしている。この派の人々は十字架にかけられた後、五日目にイエスが天の神の御元に着いたと信じている。また三位一体の創造を信じている。

⑤ サルベーション・アーミー教会 (Sarvation Army Church) ; この教会はコート・ロード (Court Road) のガンディー・アーシュラム (Gādhī Āśram) の近くの第25大隊駐屯地の前にある。1930年に建てられた。チャーワニーの南、シヴィル・ラインズにある。この派の人々はイースターの祭りをもっとも熱心に祝う。本部はカルカッタにある。救世軍の将軍がかつてこの教会を訪れたことがある。しかし、訊ねてみてもそれがいつのことであったのか不明である。この派には軍隊式に一つの旗の下をくぐって入場する慣習があり、それがバプティスマと同様のものとなっている。

1979年2月12日、ナワーブブラー、ムラーダーバードにて記す。
プシュペーンドラ・ヴァルナワール。

註

- (1) (700-750)。不二一元論を説き、インド最大の哲学者と称される。ケーララ州のカーラディー (Kāladī) で生まれ、諸国を遊説した後、ヒマラヤ地方のケーダールナート (Kedārnāth) で歿した。
- (2) Śaṅkara シヴァ神の別名。恵を与える者の意。シヴァの光明面を表現する名前。
- (3) Thān 本来は単に場所を表わす語だが、特に神、女神の住い所を意味する場合がある (< S. sthāna)
- (4) インド暦12月。太陽暦では2~3月頃にあたる。
- (5) 白檀またはサフランで染めた米。神像を新たに安置する時、また結婚式の時などにそれぞれ像、新郎、新婦の額につけたりする。
- (6) ホーリーの八日の意。パールゲン月の白半の八日から満月までの八日間。この間は旅行、結婚等の祝い事は避けるのが普通である。
- (7) インド暦1月。
- (8) 僧院、学院。一人のマハント (僧院長) を中心に修行僧たちが生活しながら教学と修行をする場所で、マンディルとは元来性格を異にする。
- (9) 最初の主の意でシヴァ神の別名。特にナート派の伝説上の創始者としてこの名で呼ばれる。
- (10) サンスクリット語ではマナスイ (manasi) はマナス (manas = 心) の単数処格形で「心の中に」「心において」程の意味となる。
- (11) 普通には、中世北インドで唯一、無属性 (Nirguṇ) 、遍在する神への信仰を唱え、偶像崇拜を始めとする既成宗派の偽善を攻撃した一群の聖者 (Sant) たちを指す。中でも後述されるカビール、ナーナクは代表的なサントである。
- (12) 一説ではヴァイシャ階級。ヴィシュノーイーの名はヴィシュヌへの信仰からついた名である。
- (13) グプタ朝を亡ぼしたフーナ族 (白匈奴) の王。(在位510-528)。仏教徒を残酷に弾圧したことで知られる。
- (14) 10世紀ごろからアッサム、ベンガル、ネパール、次いで北インド一帯に広まったヒンドゥー教の一派。タントラ教の影響が強く、仏教の金剛乘、シャクティ派、アゴール派ともつながりを持ち、ハタ・ヨーガによって肉体の鍛練を重視する。スィッタとは修行を完成した者を言い、84名を数える。
- (15) ハタ・ヨーガの修行者の意で、上記ナート派とほぼ同義で使われている。ハタ・ヨーガは荒行ヨーガとも肉体のヨーガとも言われ、ヨーガの思弁的一面を離れてひたすら苦痛を伴う坐法を修し、超人的な力を得ようとするものである。
- (16) シヴァ神の妃ドゥルガー、またはカーリーの神聖な活動力 (性力) を崇拜するタントラ教の一派。

- (17) 84 人のスィッダの内の一。カーンハパー (Kāṅhapā) とも言う。ゴラクナートの弟子であったと言われている。
- (18) 集団で輪座して酒 (Madya)、肉 (Māṃsa)、魚 (Matsya)、炒った穀物 (Mudrā、または印契) を食し、交接 (Maithuna) に耽る修行法。いずれもマの字の頭文字を持つことからかく言う。
- (19) インド暦 5 月。雨期に当たる。
- (20) 一名シヴァラートリ。本来は黒半の 14 日だが、一般にはシヴァテラス (Śivateras) と呼び 13 日に祝う。この夜、精進潔斎し夜を徹しシヴァに祈ると、シヴァに合一し輪廻を断ち切ることができると言う。
- (21) シヴァ・リングアの丁度上にくるように、三脚台に水のはいった水瓶を載せ、底に空けた小さい穴からゆっくりと滴がリングアに垂れるようにしてする灌頂法。
- (22) 世界の創造主ブラフマン (Brahman) を信じ、ブラフマンとの合一によって解脱を図ろうとする者。
- (23) 別名ルドリー (Rudrī)。ヤジュルヴェーダ (Yajurveda) のルドラ、そしてヴィシュヌに関するマントラを八章に編集したもの。シヴァラートリの祭の日に夜通し誦読される。
- (24) ムリトゥンジャヤとは死に勝つ者の意。またシヴァ神自身の別名でもある。
- (25) 種子真言。マントラの本質、またマントラを唱える対象となる神格の名などを簡潔に表現するために神秘的な短い音を重ねたもので、普通マントラの最初に唱えられる。
- (26) ヴィシュヴァカルマン (Viśvakarman)。リグ・ヴェーダの神格で、「一切物の創造者」の意。天地創造の力を神格化したものであり、最高の創造者であるとともに宇宙的な知識と知恵をあらわしている。(菅沼晃編、「インド神話伝説辞典」)
- (27) ダクシャはブラフマー神の息子でアーディティヤ神群の一人。人類を生みだした 10 人の聖者、プラジャーパティ (創造物の主) の一人。(同上)
- (28) 「顎骨を持つ者」の意味でラーマを助けてランカーの羅刹王ラーヴァナからシーターを救出するのに協力した猿の勇士。(同上)
- (29) (Kamaṇḍal) 行者たちの携行する飲み水を入れた容器。金属、土、瓢箪、海椰子で作ったものなどがある。
- (30) 普通は米粉、麦粉などを混ぜて作った顔料を用いて、女性が家の戸口、壁面などに吉祥の印として描く文様状の絵を指す。
- (31) Ⅲ - (3) を参照。
- (32) 「近づき難い女神」の意で、シヴァの神妃。カーリーとともにシヴァの暗黒面をあらわしている。(菅沼、前掲書)
- (33) 「恐ろしい者」という意味で、シヴァ神の別名。(同上) また、シヴァの眷族の一人でシヴァ自身の化身とも言われる。バイローン (Bhairō)。
- (34) 元来は小さいマトを表わす。また、ナート派の行者の墓があり、そこに行者たちが住んでいるような場所のことと言う。

- (35) シュラーヴァナ月の 5 日。ナーガとは蛇、殊にコブラを指す。この日、主として女性はヴラタの誓戒を立て、蛇穴に牛乳、乳粥、蓮華などを供える。こうすると一年間、家族ともども蛇の害から守られると信じられている。
- (36) シュラーヴァナ月の満月の日。この日、女性たちは男兄弟の無病息災を願って、またバラモン僧は自分の施与者たちを祝福して、それぞれ彼らの右手首にラーキーと呼ばれる木綿または羊毛の紐を結ぶ。本文にあるようにジャライー (Jaraī) と呼ばれる稲または大麦の苗を結ぶこともある。
- (37) バードラパダ (Bhādrapada) 月 (インド暦 6 月、雨期にあたる) の黒半の八日。クリシュナ神の生誕祭。
- (38) バルトリハリ (Bhartṛhari)。ウツジャイニーの王ヴィクラマーディティヤの弟と言われる高名な詩人。妻の不貞を知って出家しヨーギーとなった。13 世紀頃に実在したナート派の行者とも言われる。
- (39) 前記バルトリハリの姉妹マイナーヴァティーの息子と言われている。ナート派の行者で、スィッダの一人であった、ベンガルのゴーヴィンドチャンドと同定されることがある。
- (40) 12 世紀のナート派の行者で、マツェンドラナート (Matsyendra-nāth) の弟子。ゴラクナート派の創始者。この派の行者は水晶、木、石等でできたイヤリングのために耳を穿つことからカンパター (Kanphatā) とも呼ばれる。
- (41) 代表的な弦楽器の一種。ナート派の行者たちは有名なスィッダたちの生涯や讃歌をこの楽器の伴奏で語りながら、布施を半ば強要して歩く。
- (42) 「山の娘」の意。シヴァの神妃であるが、ドゥルガーまたはカーリーとは違い、美しく貞節な性格でガネーシャとスカンダの母である。
- (43) モスク、学校、病院等の公共施設、または福祉施設のために土地などを寄進すること。またはその土地を指す。
- (44) ムガル第 6 代皇帝。在位 1658 - 1707 年。
- (45) バードラパダ月の白半の 3 日。ハリターリカー (Haritālikā) または単にティージとも言う。この日、女性たちは新しい服に着替えヴラタを行ない、特にシヴァ・パールヴァティーを礼拝する。
- (46) ジューシュタ月の白半の 10 日。ガンガー・ダシャハラー (Gaṅgā Dasaharā) とも言う。ガンガー川が地上に降下された日とされ、この日、ガンガー川で沐浴をすると 10 の罪が清められるという。
- (47) 真鍮の盆に精製バター (ギー) または樟脳を燈した灯明を載せ、神像の足元で 4 回、臍の前で 2 回、顔の前で 1 回そして全身の前で 7 回、廻らす。花婿、またはバラモンに対して行うこともある。
- (48) ラーマーナンダ (Rāmānanda, c.1360 - c.1470) の創始したヴィシュヌ派の一派。ラーマヌジャ派から分かれた。大衆に向って易しい言葉で、ラーマへの信愛を説きカーストの別を重視しなかった。カピールの師とも言われる。
- (49) 女性の子宮を象った部屋で普通寺院の中央部にあり本尊が安置される。内陣。

- (5 0) 繁栄、栄誉、幸運の女神。吉祥天女。古くはラクシュミーとともに太陽神アーディティヤの二人の妻とされたが、後世、この二人の女神は同一の女神とされるようになった。(菅沼、前掲書)
- (5 1) ブラフマー神の妻で幸運と美の女神であったが、後にヴィシュヌ神の神妃とされるようになった。シュリーと同じ女神とされる。
- (5 2) 叙事詩ラーマヤナの主人公ラーマ王子の妃。ヴィデーハ王ジャナカの娘。夫ラーマに対する貞節から後世婦人の鑑と敬愛されるようになった。
- (5 3) 金、銀、銅、錫、亜鉛、鉛、鉄、水銀の八種。
- (5 4) ヴリンダーヴァナの牛飼いアヤナゴーシャの妻。クリシュナの愛人。二人の恋愛はインド文学の最も重要な主題の一つである。
- (5 5) ヴィシュヌ神の化身と考えられている黒色菊石(アンモナイト)。ヴィシュヌ派信徒はこの石に花、香、果物等を供え、礼拝する。ヒマラヤで産する。
- (5 6) チョウラーハーは四ツ辻の意。道、殊に四ツ辻には様々の鬼霊が住み、人間に種々の影響を及ぼすとの民間信仰はインドばかりではなく世界中にみられるところである。ここでいう四ツ辻の女神もその一種か。
- (5 7) 今日の標準ヒンディー語の母体となった言語でデリー、メーラト近辺で話されている。ムラーダーバードもそこに含まれる。
- (5 8) プラークリット語の一種。
- (5 9) 北部州のラームプルで話されているクマールニー方言の一派。
- (6 0) 西部ヒンディーの代表的言語。アグラ、マトゥラー地方を中心に話されている。文学用語としてはクリシュナ信仰にまつわる詩作品その他に用いられ、中でもスールダース(Sūrdās) 作スールサーガル(Sūrsāgar) が名高い。
- (6 1) 東部ヒンディーを代表する言語。アワド地方そしてラクノー、イラーハーバードなど都市部でも用いられる。文学作品としてはトゥルスィーダースのラーム・チャリト・マーナスが最も重要である。
- (6 2) 別名カテーリヤー(Kāṭheriyā)。ラージプートの一族。
- (6 3) トゥルスィーダース、(c.1527 - c.1623)。ラーマナーンダから数えて七代目の弟子。ラーマヤナをアワディー語に翻案したラーム・チャリト・マーナス(ラーマ王子の行ないの湖)によって不朽の名声を得た。
- (6 4) ヒンドゥーの七大聖都の一つで、古代のサラユー川の岸に、現在のファイザーバードから4マイルの所にある。日種族の王城の地。ラーマ王子はこの地で成長した。
- (6 5) 北部州西部、デリー近辺、そしてラージプターナー地方に居住するバラモン・カーストの一種。
- (6 6) マダルサー、またはマドラサ(Madrassa)。イスラムの宗教学校。授業は普通モスク内の礼拝所で行なわれるが、別に独立した施設をもつこともある。多くはモスクに付属している。
- (6 7) 皮革製造業に従事するヒンドゥーの不可触カーストの一。現在は多く農業労働者として働いている。

- (68) ラーマナンダの弟子で高名なサントの一人。15世紀の人。チャマルの出身であるが高位カーストの者も含めて大勢の弟子を持ち、有名な女流詩人、サントのミラー・バーイー (Mīrā Bāī) もその内の一人。
- (69) 「供儀の施設」の意。ヴェーダの祭式。聖火の祭壇に米やその他の穀物、牛乳、ギー、また時には肉の犠牲を投げこみヴェーダマントラを唱えつつ神々の助力を得んとする。
- (70) シヴァの別名。
- (71) 両月の最初の九日間にわたって祝われる。春と秋のそれぞれ収穫祭の性格を持つ。ドゥルガー女神を九つの姿の礼拝がなされ、九日目に各家庭で簡単に護摩を焚く場合がある。
- (72) ディーワリー (Dīwālī) ともいう。カールティカ月 (Kārtika, インド暦八月) の新月の日の夕刻から、家の内外に灯明を一行に並べ燈してラクシュミー女神を礼拝する。美しい祭りである。
- (73) タントラ教また民間信仰における鬼女。羅刹女。人肉を喰らい、カーリー女神の眷族とも言われる。
- (74) ピシャーチャの女性形。墓場に住み薄暮に人中に出没し、思うままに姿を変え人の目には見えないという。もし見た者は九ヶ月以内に死ぬとも言う。羅刹女。
- (75) 左道シャクティ派の中でも最も過激な行法を修する一派。酒肉の他に糞尿、死体までも殊更に喰い、見るからに不潔な身形で徘徊する。
- (76) 「大性力」の意でカーリー女神の別名。
- (77) チャンディーはドゥルガー女神の別名。ドゥルガーが様々の魔物を滅ぼす物語。
- (78) 小麦粉を精製バターで炒めてシャルバトもしくは砂糖水で煮つめた甘い料理または菓子。
- (79) 方形に高くなった、聖樹トゥルシー (神目薬、シソ科の一年草) の花壇。ヴィシュヌ神との結びつきが強く、信者は毎朝水と牛糞で根元を清め、夜は木の前にランプを燈す。
- (80) クリシュナの父親で、マトゥラーの王カンサの大臣。
- (81) ティーラーは普通、地面が盛り上がった所、丘程の意味で使われる。
- (82) 1875年ダヤーナンダが創設した団体。当時、キリスト教などから攻撃を受けていたヒンドゥー教の改革を図り、偶像崇拜、多神教等を批判した。北インド、特にパンジャブ地方で勢力を今日も保っている。
- (83) (1824 - 83) ヴェーダ学者。社会改革家。グジャラートのサーラスヴァタ・バラモンの裕福な一家に生まれ、22歳で苦行者となった。諸国を遊説行脚し、75年にアーリヤ・サマージを創設した。
- (84) ダヤーナンダの主著 (1874年)。「真理の意味の光明」彼の思想の集大成であるばかりでなく、カーリー・ボーリー・ヒンディー語の初期の文章語の例としても貴重なものである。
- (85) シヴァ派の一派で、この派の人々は以前は全裸で身に一物も着けないことで知られていた。また、しばしば騒擾を引き起こしヴィシュヌ派信徒と

- 争い死人をだすようなこともあった。
- (86) ティーカー(*Tīkā*)。水に溶いた白檀、またはサフラン等で額、腕などに宗派の印として描く模様。
- (87) スィッダ、ナート派のヨーギーたちが人々の無病息災を祈願するために孔雀の大幟、火箸などを持ち、集まる一日の祭り。I-(6) 参照。別の訳出しなかった箇所でもジャナマーシュタミーの日に行なわれるとあるが、X-(16) ではラクシャーバンダンの祭の頃とある。
- (88) 底部が広い管状になった土製の煙草皿。管の部分を手を持ちたり、水煙管に載せたりして煙草あるいは大麻を吸うのに用いられる。
- (89) 中世のヒンドゥーの勇者アールハーとウーダラ(*Ūdala*) を主人公にした勇壮な歌物語。北インドの村々で好んで雨期に歌われる。
- (90) パラシュラーマ・ジャヤンティー(*Paraśurāma Jayantī*) ヴァイシャーカ(*Vaiśākha* = インド暦 2 月) 月の白半の三日。現在では殆んど祝われることのなくなった祭である。
- (91) またはバギーラタ(*Bhagīratha*)。アヨーディヤの日種族の王。厳しい苦行のかいあってガンガー川を地上に将来したと言う。
- (92) マハーバーラタにおいてカウラヴァとパーンダヴァ両族の勇士に弓術を教えたバラモン。彼自身はパラシュラーマから弓術を教わったとされる。
- (93) パンチャーラ国の王。上記ドローナの竹馬の友であったが、やがて大戦争において彼に殺された。パーンダヴァの五王子の妻ドローパーディを娘に持つ。
- (94) マハーバーラタの中心的人物像の一人。シャーンタヌ王とガンガー女神の第八子。生涯独身の誓いを立て、ビーシュマの名(厳格な、厳しいという程の意味) もそこに由来する。大戦争において戦死する。
- (95) シャーンタヌ王の養子。ドローナと同じくカウラヴァ、パーンダヴァの若者の弓術の師範となった。彼の姉妹のクリパー(*Kṛpā*) はドローナの妻でもある。
- (96) 註(46) 参照。
- (97) カールティカ月(*Kārtika* = インド暦 八月) の満月の日。この日ガンガー川を始めとする聖河で沐浴すると罪業を滅し、多くの功德を積むことのできる神聖な日とされる。有名な聖地、聖河の近くにはインド全土に大小の市が立ち賑わう。
- (98) 仏教建築では普通、塔院と訳され、内陣の奥にストゥーパを安置した礼拝供養のための場所とされている。
- (99) 詩聖カーリダーサ(*Kālidāsa*) 作の叙情詩。「雲の使者」。
- (100) マッリナータ・スーリ(*Mallinātha Sūri*) 14 ~ 5 世紀のサンスクリット・カーヴィヤの有名な註釈家。
- (101) (*Śvetāmbara*) と (*Digambara*)、白衣派は僧尼の着衣を容認するに対し、裸行派は無所有の教えに反するとして裸行の遵守を主張すること、また裸行派は裸行の実践の不可能な女性の解脱を認めないことなど、概して白衣派は寛容主義に立つ進歩的グループ、裸行派は厳格主義に徹する保

- 守的グループといえる。(早島鏡正 「仏教・インド思想辞典」)
- (102) ジャイナ教第八代の祖師。
- (103) (c.前599～c.467、生没年についてはその他諸説あり)。ジャイナ教の開祖。苦行の末、ニルヴァーナを得てジナ(勝利者)ともマハーヴィーラ(大勇者)とも称された。
- (104) 始祖リシャバ(Rṣabha)より数えて第五代目の祖師。
- (105) ジャイナ教第23代の祖師。前8～9世紀の人。ベナレスの王家の生まれであったが30歳で出家した。マハーヴィーラの両親は彼の信者であった。ジャイナ教の実際的な創始者と言われることもある。
- (106) (1440-1518) ベナレスの貧しいムスリムの職工の子。一説ではバラモンの寡婦の私生児とされる。ラーマナンドの弟子の一人で、ヴィシュヌ派の改革者。偶像崇拜と様々な偽善を攻撃し、唯一至高の神への信愛を大衆の言葉で説いた。ヒンドゥー、ムスリム両教徒の信者を多く得た。現在カビールパンティー(Kabīr Panthī)と呼ばれる彼の信徒は約50万人程で北部州に多く住んでいるが、偶像崇拜に回帰するなど師の教えとは多くの点で違い違っている。
- (107) サハジャ乗。左道密教の変形。サハジャとは「生来」「生まれつき」という意味で、さとりは本来そなわっているものであるから、人間の性情を肯定することを説く。このサハジャ乗では美しい娘に対する愛情が解脱への道であるなどと説く。(中村元 「インド思想史」)。
- (108) バール(Bhār)と呼ばれる煉瓦造りのかまどで穀物を炒ることを本業とするヒンドゥーのカーストの一種。次のブルジーも同じ。
- (109) カビールの宗教詩の集成。カビール派の聖典。サーキー(警句)とラマイニー(ドーハー、そしてチョーパイー詩型による教義、思想詩)を収めている。
- (110) シク教の根本聖典。第五代グル・アルジュン(Arjun)(在位1581-1606)が、歴代のグルとカビールらサントの宗教詩を編纂したもの。グル・ゴヴィンド・スィンハの遺言により、以後この書物自体がグルと見なされるようになった。
- (111) クンダリーは、クンダリーニ(Kuṇḍalinī)とも言い、ハタ・ヨーガに於て体内下部に三回半のとぐろ(Kuṇḍalinī)を巻いて眠る蛇として、人間の神秘力を象徴している。ヨーガの行法を通じてこの眠れる蛇を覚醒させ、体内のチャクラと呼ばれる関門を次々に通過し、やがて頭頂部の最後のチャクラに至る時、人は解脱を得るとされる。
- (112) 瞑想と行法により体内の六つのチャクラを認識することによって、体内の神秘的な感覚とエネルギーを解き放とうとする行。
- (113) パンジャブ、スィンド、ラージプターナー、そして北部州の地域に住む有力カースト。自らラージプート族の末裔と称すが、確かではない。勇敢、勤勉なことで知られ、多くは農業に従事している。ヒンドゥーとムスリムそしてシク教徒もいる。
- (114) (1469-1538) シク教の開祖。初代グル。カビールの影響

を受け、ヒンドゥー教とイスラムを批判的に統合させた。外面的なヒンドゥー、イスラム両教の礼拝方法を批判し、カースト制度を否定、ヴェーダの権威も認めなかった。人格の高潔さと優しさから今も宗派に関わらず多くの人々に敬愛されている。

- (115) (1666-1708) 第十代の、そして人間としては最後のグルとなった。ムガル帝国の弾圧に抵抗し、シク教団をカールサーと呼ばれる疑似軍隊組織に改め、携帯すべき五つのシンボルを定めた。彼は殉教する際、グル・グラント・サーヒブを後継グルに遺言した。
- (115) 給与をもらって経典を読み、礼拝式を司り、結婚式などの儀式をとり行なっているが、その役目はあくまで礼典係にすぎないし、終身とは限らない。(コール&サンビー、「シク教」)。
- (116) (c.1270-c.1350) マハーラーシュトラのヴィシュヌ派サント。仕立屋カースト出身で、彼の60篇の詩がグル・グラント・サーヒブに、シク教徒以外のサントの詩、バガト・バーニー (Bhagat Bānī) として収められている。以下、ラヴィダース [ライダースに同じ。註(68)参照] が41篇、ラージャスターン出身のダンナージーが四篇、シンド出身のサドナージーが一篇等々、いずれもわずかづつではあるが収められている。シェーク・ファリードはイスラム神秘主義者のスーフィーであった。彼の作品は134篇と比較的多数が収められている。
- (117) 20世紀始め、非シク教徒のマハントの所有になっていたグルドゥワラーをシク教徒の手に取り戻そうという運動の中心になった団体。ニハング (Nihāᅅg) と呼ばれる、青い制服に銃、長剣で武装した人々もこの派に所属している。
- (118) 19世紀に生まれた改革派。バーバー・ラーム・シンハ (Bābā Rām Simh) の指導のもとにシク教から非シク教的習慣を一掃しようとした。
- (119) Mawlāwī Aᅇmad Riᅇā Khān (b.1855) に率いられた厳格なイスラム復古主義者の一派で、特に連合州、パンジャブ州のムスリム大衆に強い影響を与えた。
- (120) 1867年にムハンマド・カーシム (Muᅇammad Qāsim) によって設立されたイスラム学院。イギリス支配下のインドでイスラム法を護持する目的を掲げ、政治的にはイスラム宗教指導者によるインド民族運動の中心となった。今日でもイスラム圏の代表的神学校に数えられている。(平凡社、「イスラム事典」)
- (121) 18世紀半ばアラビア半島に起ったイスラム改革運動。復古主義的立場でイスラムの純化を目指した一派で、その強い影響は一時、インドにまで波及した。
- (122) マホメットの死後、相次いでカリフの位についた四人の指導者。いわゆる正統カリフと呼ばれる人々。
- (123) アブー・ハニーファ (Abū Hanīfa) の名によって名づけられたスンナ派イスラムの法学派。ムガル帝国では最も権威ある法学派とみなされ

- た。以下いずれもスンナ派法学者の名をとった代表的な公認された法学派名。
- (1 2 4) ハディースはマホメットの言行に関する伝承。極端なイスラム復古主義者で、ハディースとコーラン以外に何者の権威も認めない。
 - (1 2 5) ムハンマドの従兄弟で女婿でもあるアリーを正統な後継者とするイスラム諸分派の総称。
 - (1 2 6) シーア派とともにイスラムを2分する一派。イスラム共同体内で圧倒的多数を占めるため、しばしば正統派と呼ばれる。インドにおいてもムガル帝国はスンナ派であり、多数派である。
 - (1 2 7) *Mīrzā Ghulām Ahmad* (1 8 3 9 - 1 9 0 8) の創唱した一派。アフマディー教団。彼は自らを救世主の再来と宣言した。現在も世界中で積極的に布教活動を行っている。
 - (1 2 8) 聖者、殊にスフィーの聖者の命日の祭り。この日をはさんで数日聖者廟の回りには市が立ち、参詣者で賑わう。
 - (1 2 9) 礼拝の時刻を告げるための、ミーナール(塔)からの肉声によるアラビア語の呼び掛け。
 - (1 3 0) イスラムの聖廟。聖者の墓で霊験があるという評判が立つと善男、善女が集まり聖廟となる。廟内では毎週木曜の夕方に宗教行事が開かれる。(平凡社、前掲書)
 - (1 3 1) ラマダーン月の断食が終わった翌日から三日間、イードの祭りが盛大に祝われる。この日、ムスリムはイードガーハと呼ばれるミフラーブ壁の設けられた広場に赴き集団で礼拝する。
 - (1 3 2) ペルシア語のチハル(40)から出た語で、40日間一人で坐し断食をしつつ神に祈る行。
 - (1 3 3) ペルシア語では王宮を指すが、インドでは特に聖者廟を言う。前記マザールまたズィヤラトと言われるものと同じ。有名なダルガーハにはインド全土から巡礼者が来るものもある。
 - (1 3 4) イスラム暦7月。
 - (1 3 5) 各都市の中心的なモスクで、正式にはマスジド・アルジャーミー (*Masjīd al-jāmī'*) と言う。毎週金曜日正午に集団礼拝が行なわれる。
 - (1 3 6) ムガル第五代皇帝。在位1628-57。デリーのラール・キラール (*Lāl Qilā*) 及びジャーマ・マスジドを建造したのもこの皇帝である。
 - (1 3 7) スーバはムガル帝国の地方単位の一つで州にあたる。スーベ・ダールは州長官の意で、地稅徴収以外の権限の多くを皇帝から委任されて、地方統治を代行した。
 - (1 3 8) この場合のイマームとは各モスクの専属の集団礼拝の指導者。正しい礼拝の方法を心得ていれば、特別の資格を要せず、聖職者でもない。(平凡社、前掲書)
 - (1 3 9) 「ムラーダーバード市の教育機関」参照。
 - (1 4 0) ムガル第七代皇帝。在位1707-12年。
 - (1 4 1) あるいは1787年の誤りか。
 - (1 4 2) (1 8 1 7 - 1 8 9 7) 1 8 5 7 年の大反乱後、インドにおけるム

- スリムの地位向上、教育の発展に努力した。アリーガルに1875年ムハマダン・アングロ・オリエンタル・カレッジ（現アリーガル大学の前身）を開きムスリム知識人、官吏の養成を図った。
- (143) 部屋一般を指すが、特に神に祈るための小部屋を指すこともある。
- (144) (b.1890) ムラーダーバード生まれ。酒豪詩人。
- (145) モスクの礼拝室の四壁の中で、とくに聖地メッカに面する側の内壁中央にもうけられるアーチ形の壁龕。メッカの方角を示すために重要である。
- (146) 金曜日の正午の集団礼拝や二大祭（イード）の礼拝の祭に、礼拝に先立ってなされる説教。（平凡社、前掲書）
- (147) (前324-297頃) マウリヤ王朝の創始者。
- (148) ムスリムの牛飼、また牛乳を販売するカースト。
- (149) またはディーワル (Dhīwar) 漁師カースト。このカーストの人たちの触れた水は上位カーストの人たちも飲んでよいとされる。
- (150) 殉教祭。ムハッラム月（ヒジュラ暦1月）の10日。シーア派は、3代目イマーム、フサインがこの日にカルバラでウマイヤ朝軍によって虐殺されたのを記念して、盛大な哀悼祭を行う。（平凡社、前掲書）。
- (151) パラーヴは旅の途中で休息する場所の意。著者によれば、ムスリムが村から町に来て一ヶ月以上滞在する時、その地で礼拝を繰り返すことによってそこが礼拝地となりやがてそこに建設されるようになったマスをドをパラーヴのマスをドと呼ぶと言う。なお、この一節は便宜上、ここに挿入した。
- (152) マサド等の宗教施設の管理責任者を言う。
- (153) 「十二門の建物」の意。普通、庭園内に設けられた、四方に開けて風通しの良い、柱だけで壁のない夏向きの部屋のこと。
- (154) 当時のイギリス新国王ジョージ五世のインド訪問を記念して開かれた接見式典。インド全土から大小の藩王、貴族、高官たちが参加した。
- (155) (Companion of the Bath) バス勲位騎士。
- (156) (Knight Commander of the Star of India) インド星上級勲騎士。

解題

ここに訳出したレポートは印度民族研究第4号に掲載された、同じ著者による「ムラーダーバード市の教育機関」の姉妹篇とも言うべきものである。しかし、何分にも長大なため、直接宗教施設に言及しない部分を中心に、全体の四分の一程を残念ながら割愛せざるを得なかった。その中にはムラーダーバード市の略史、執筆当時のヒンドゥー・ムスリムのコミューナルな対立についてなど、興味深い部分も少なくない。幸い、略史については第4号掲載のレポートに訳出されているものがあるので、そちらを参照されたい。

(訳、註、高橋 明)